甲府市文化財調査報告 25

史跡 武田氏館跡XII

— 平成14年度天守台地点試掘調査概要報告書 —

2004

甲府市教育委員会

序

現在、全国的に地域の歴史や伝統文化、自然が資源として見直され、活用されつつあります。このことは、歴史・伝統文化・自然がいかに重要であるかをあらためて実感させてくれます。

甲府市教育委員会では史跡武田氏館跡の保存・活用を図ることを目的として整備活用委員会を設置し、整備基本構想・基本計画の策定作業を進めてまいりました。本年、整備基本構想の策定を終了し、来年度、整備基本計画策定を実施することとなりました。住民生活と史跡保護の調和を図りつつ、「市民憩いの史跡公園」となるよう引き続き努力する所存でございます。皆様方の御支援と御協力をお願い申し上げます。

本書には、昨年度に実施しました天守台の試掘調査、及び石垣測量調査の成果を収録いたしました。これら成果は、広く中近世城郭研究へ寄与する学術資料になるものと大いに期待しております。本書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、地域の歴史・文化を再認識する機会となれば、この上ない喜びであります。

末筆となりましたが、日頃より史跡整備事業や発掘調査に御指導いただいております関係各位に、感謝申し上げるとともに、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成16年３月

甲府市教育委員会
教育長　角　田　智　重

例　　言

1．本書は山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目地内に所在する国指定史跡武田氏館跡の、平成14年度に実施した整備基本構想・基本計画策定に関わる事前の試掘調査の概要報告書である。

2．本館跡は、昭和13年（1938）に国史跡の指定を受けており、文化庁・県教育委員会・史跡武田氏館跡調査団の指導の下、甲府市教育委員会が主体となって調査を実施した。調査経費は国・県の補助金の交付を受けている。

3．本書に関わる試掘調査の担当は伊藤正彦であり、対象地区・調査面積は以下の通りである。

天守台地点　　約１，６００㎡

4．本書の編集・執筆は、中込　功(文化芸術課長)を責任者とし、伊藤正彦が行った。

5．本書の挿図は中村里恵が作成した。

6．本書に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。

7．本書に関わる写真測量業務は（株）フジテクノに、出土品の保存処理業務は（財）帝京大学山梨文化財研究所にそれぞれ委託した。

8．発掘調査及び報告書作成に際して次の機関・諸氏からご指導ご協力を賜った。厚くお礼を申し上げる次第である。

文化庁文化財保護部記念物課　　山梨県教育委員会学術文化財課　　武田神社
伊藤正義　　磯貝正義　　小野正敏　　北垣聰一郎　　清雲俊元　　笹本正治
鈴木　誠　　萩原三雄　　本中　眞　　八巻與志夫　　（敬称略）

凡　　例

1．本書に掲載した遺構番号は、調査現場において付けたものである。

2．遺構名は各遺構の形状・検出状況に応じて調査現場において付けたものである。

3．全体図、遺構・遺物実測図の縮尺は図中に表示した通りである。

4．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示している。

5．報告書中の方位は磁北を示している。

調査組織

［史跡武田氏館跡整備活用委員会　委員名簿］

平成15年８月１日現在

委員長	角田智重	甲府市教育委員会教育長
副委員長	清雲俊元	山梨郷土研究会理事長
委員	小野正敏	国立歴史民俗博物館助教授
同	萩原三雄	帝京大学山梨文化財研究所所長
同	笹本正治	信州大学教授
同	鈴木　誠	東京農業大学教授
同	八巻與志夫	山梨県埋蔵文化財センター資料普及課長
同	山本　等	相川地区自治連合会長
同	数野正俊	日影自治会長
同	清水辰晴	峰本自治会長
同	日向虎男	大手自治会長
同	保坂　中	大手東自治会長
同	土橋勝夫	武田神社宮司
同	土屋正文	山梨県教育委員会学術文化財課長
同	谷川義孝	甲府市議会議長
同	山村雄二	甲府市議会議員
同	渡辺礼子	甲府市議会議員
同	佐久間　勲	甲府市都市建設部長
同	中澤正治	甲府市教育委員会教育部長

［史跡武田氏館跡発掘調査団］

団長	清雲俊元	山梨郷土研究会理事長
	小野正敏	国立歴史民俗博物館助教授
	萩原三雄	帝京大学山梨文化財研究所所長
	笹本正治	信州大学教授
	八巻與志夫	山梨県埋蔵文化財センター資料普及課長
	鈴木　誠	東京農業大学教授
	土屋正文	山梨県教育委員会学術文化財課長

オブザーバー

本中　眞	文化庁文化財部記念物課主任調査官
伊藤正義	文化庁文化財部記念物課調査官
末木　健	山梨県教育委員会学術文化財課文化財指導監（H14年度）
新津　健	山梨県教育委員会学術文化財課文化財指導監（H15年度）
八巻與志夫	山梨県教育委員会学術文化財課副主幹（H14年度）
出月洋文	山梨県教育委員会学術文化財課副主幹（H15年度）
山本茂樹	山梨県教育委員会学術文化財課主査
小林健二	山梨県教育委員会学術文化財課副主査（H14年度）
吉岡弘樹	山梨県教育委員会学術文化財課副主査（H15年度）

事　務　局

角田智重	教育長
有泉正仁	教育部長（H14年度）
中澤正治	教育部長（H15年度）
渡辺卓信	教育部次長
中山正仁	教育部次長（H15年度）
中込　功	教育部文化芸術課長
数野雅彦	教育部文化芸術課文化財係長（H14年度）
信藤祐仁	教育部文化芸術課文化財係長・文化財主事
寺本義雄	教育部文化芸術課文化財係長（H15年度）
伊藤正幸	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
志村憲一	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
伊藤正彦	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
平塚洋一	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
佐々木　満	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
松尾裕美子	教育部文化芸術課文化財係

発掘調査参加者

（一　般）

雨宮英郎	石部祖代	長田美智子	小澤四郎
岸本美苗	栗田宏一	工藤忠誠	小池孝男
小池幹子	佐田金子	清水秀樹	高橋主税
寺田恒造	中込幹一	中村孝一	長澤晴雄
波木井祥和	樋口　進	平沢則子	深沢春美
古屋袈裟男	向井袈裟春	水上善郷	渡辺　茂

（学　生）

浅木一希	大高広和	長田隆志	坂本道穂
高野宜秀	武井裕太	野澤渓子	林　雅彦
藤田美里			

目　　次

序
例　　言
凡　　例
調査組織
史跡武田氏館跡整備活用委員会委員名簿
目　　次
挿図・表目次

第１章　調査概況

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査地の概要……1
第３節　調査の方法と経過……1

第２章　調査成果

第１節　遺構と遺物……4
(1)　土塁内石積み……4
(2)　北側出入り口……4
(3)　西側出入り口……6
(4)　天守平場西側集石……6
(5)　石　垣……6
第２節　小　括……21

挿　図　目　次

図１　調査地点全体図
図２　年度別調査範囲……2
図３　トレンチ配置図……3
図４　トレンチ１……5
図５　天守北側出入り口部……7～8
図６　天守西側出入り口部(1)……9～10
図７　天守西側出入り口部(2)……11～12
図８　天守台石垣１・隅角部側面図……13～14
図９　天守台石垣２側面図……15～16
図10　天守台石垣３側面図……17～18
図11　天守台石垣４・５側面図……20
図12　天守台石垣２断面図……23～24
図13　天守台石垣３断面図……25～26
図14　天守台石垣４・５断面図……27～28
図15　遺物実測図(1)……29
図16　遺物実測図(2)……30
図17　遺物実測図(3)……31

別添１　史跡武田氏館跡天守台平面図
別添２　史跡武田氏館跡天守台トレンチ平面図

表　目　次

表１　石材寸法別構成比(1)……21
表２　石垣勾配表……21
表３　石材寸法別構成比(2)……22
表４　土器・陶磁器観察表(1)……32
表５　土器・陶磁器観察表(2)……33
表６　壁土観察表……33
表７　石器観察表……33
表８　金属器観察表……33

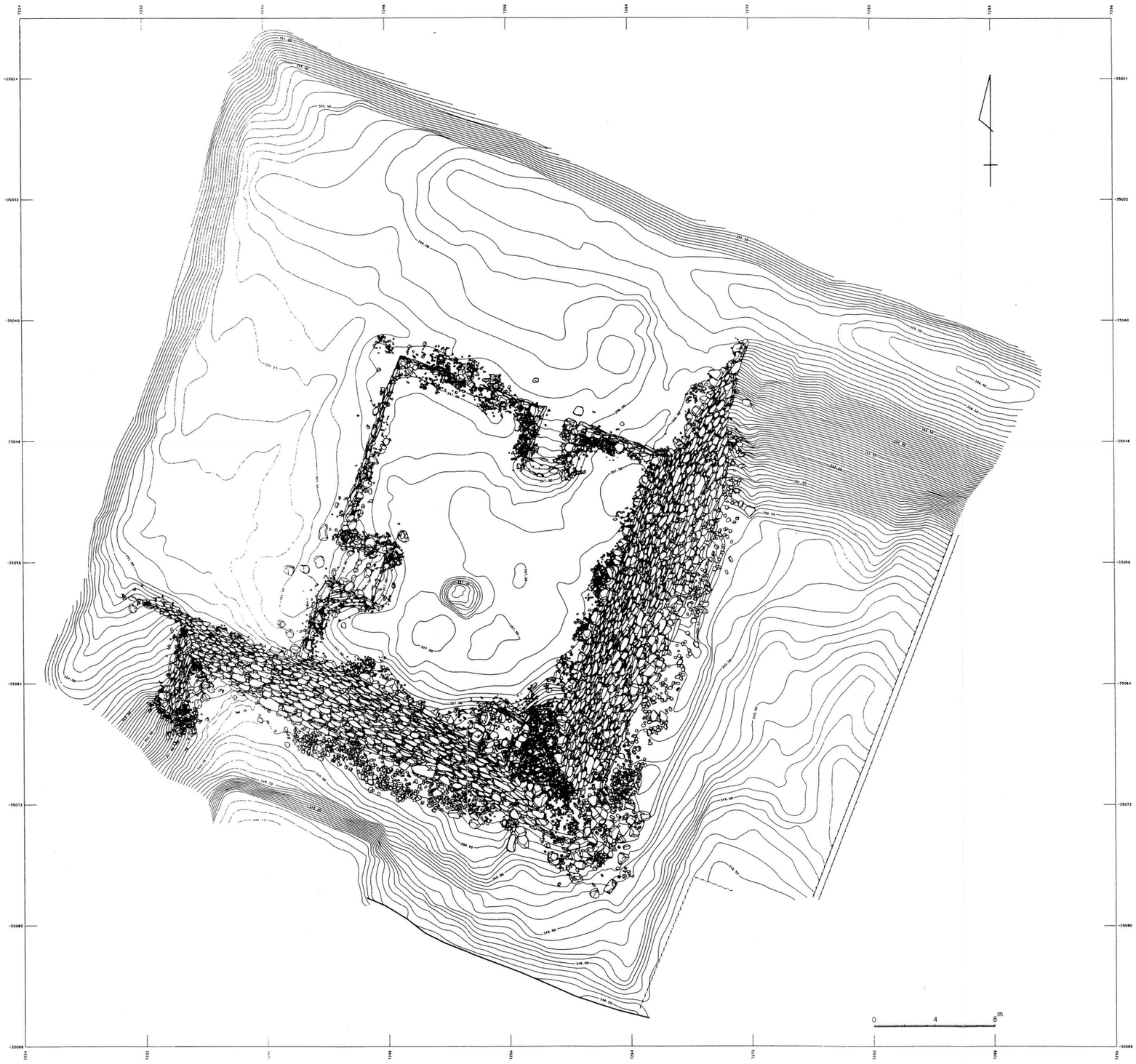


図１　調査地点全体図（Ｓ＝1：300）

第1章　調査概況

第1節　調査に至る経緯

平成7年より実施している史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画策定に関る、基本資料収集を目的とした試掘調査の一環である。平成13年度までの調査成果は『史跡武田氏館跡発掘調査概要報告書』III・IV・IX・Xとしてすでに刊行している。平成14年度は天守台地点を調査した。調査地点の選定に際し、史跡武田氏館跡調査団会議に諮り、承認を経ている。

第2節　調査地の概要

主郭部は、二町四方となる方形の郭で周囲に土塁と堀が巡る。現在、郭内は平坦化しているが、自然地形の影響のため武田氏の時代から南北軸で三段程度の段構造となることが判明している。近世絵図によると石塁によって何区画かに区分されており、『甲斐国志』は「東曲輪」・「中曲輪」と大きく二区分して記述する。この石塁は、『北藤録』に掲載する絵図の注記から武田氏滅亡後、加藤光泰によって天正19年から文禄元年の間に築かれたものと推定される。これまでの調査により東西方向に築造された石塁基底部を確認している。

調査地点は、主郭部北西隅に位置し、近世宝永期よりいくつかの地誌類にその記述がみられる。管見の限りでは宝永3年（1706)、『風流使者記』の「内城一層臺址在其西北隅」とある記述がもっとも古いものである。その他に、「天守臺に登れば南方中郡一面に見ゆ」(『裏見寒話』宝暦期)、「天守の臺其外礎のみ残」(『甲駿道中記』文政13年)、「本丸の石垣登れば、松の並木に一座の祠あり」(『津久井日記』天保9年)、「堀の跡天守の臺斗にて藪斗と相成」(『甲州道中記』慶応2年）などの記述がある。最も詳細な記述は『甲斐国志』「屋形跡」の項であり、天守台に法性大明神の祠を置いていること、天守台跡が毘沙門堂と伝承されていること、台上規模を10間、12間と記したのち礎石が11枚残ることを記述する。さらに、西・北側の石段を門跡と推定し、石積みに野面石を使用していることなどを記述する。特に「石壁ヲ用タル処ハ、此台ノ東・南ノ二面ト、東曲輪ノ中間端門ノ方ニ向タル堤ノ片面ト二所ノミ」との記載は注目すべきである。調査により検出した石積み、あるいは現在、館跡で散見できる石積みの中で、高石垣となる箇所は、天守台と大手土橋の南面との二箇所であり『国志』の記述と見事に整合している。

天守台は主郭部土塁の北西隅を利用して構築されているため、東・南面のみに高石垣が見られる。隅角部は大きく崩落し、館廃絶にともなう破城の痕跡と推定される。現状、うっそうと草木が茂る状態であり、『国志』の記述と同じく天守台上に祠が祀られている。現在、神社の奥津城として出入りも制限された地となっている。

第3節　調査の方法と経過（図1．3）

天守台は主郭部土塁の北西隅を利用して構築され、土塁天端に合わせ最高8mの石垣が東・南側に約30mにわたり築かれる。これにより約1,120m²の空間が作り出されている。広義には、この空間を天守台と呼称しているが、天守台上には、高さ2m程の石垣を北・西側に構築することにより四周を石垣で囲われた南北約21m、東西約18mの一段高い空間が存在している。調査では、石垣で囲われた範囲を狭義の「天守台」と呼称し、それ以外の

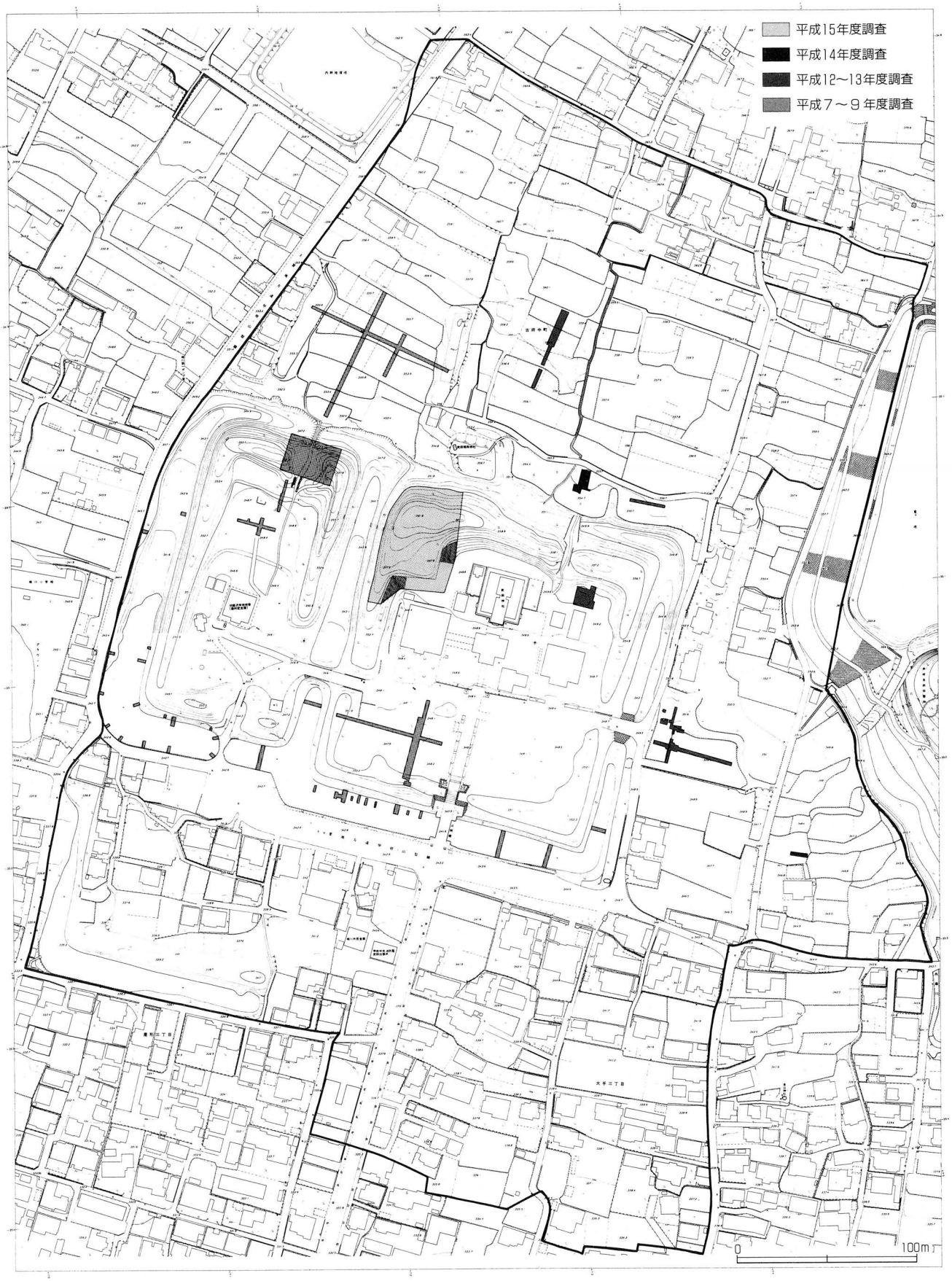


図2 年度別調査範囲

空間を「天守平場」と呼称した。

調査は、平成14年８月５日から開始した。「天守台」・「天守平場」・石垣の除草作業終了後、現況平面測量と石垣側面測量を実施した。その後、９月下旬より「天守台」上から、それぞれ北・西側出入り口を経て「天守平場」に達するよう幅２ｍ、長さ20ｍのトレンチを２本設定し、人力により掘り下げ、調査を行った。11月下旬、確認した遺構の記録図面を作成後、一旦調査を終了している。翌年３月22日に見学会を開催した後、川砂・土嚢による養生処置を行い、埋戻し作業を実施した。平成15年３月31日、すべての作業を終了している。

図３　トレンチ配置図

第2章　調査成果

第1節　遺構と遺物

(1) 土塁内石積み（図4、図版8）

トレンチ1の北端、地表下0.10mから長さ約3mにわたり検出する。主郭土塁内に、土塁線と直交方向に構築された石積みである。土塁の形状にあわせて半円形に構築されるとともに、拳大から径0.30m程の小礫を高さ0.46m積み上げている。石面も揃えず、野面石を用いた粗雑な石積みである。これまで何箇所かで確認されている土塁内石積みと同様、十分な叩き締めを行うため塡圧作業時の土の「逃げ」を防止し、土塁の形状安定・維持を目的に築かれたものである。土層堆積からは、土塁表面を覆う粘性の強い被覆層が確認でき、石積みを境に土層堆積も異なっている。確認した範囲で高さ0.46m、長さ約3mの規模であり、同一地点で土塁底から構築されず、盛土・塡圧の各作業段階でその都度構築されたものと推量される。

現状土塁の天端に崩落等の形跡がみられず、石積みも地表浅く検出されていること、天端にあわせ盛土された状況が土層堆積から観察できることなど、当初の土塁規模、構造を残したまま天守台が構築されたことが確認できる。

土塁の断ち割り調査に際し、遺物の出土は確認できなかったが、天守台構築時の盛土中からかわらけ片(図15－11)、火鉢の底部片(図15－24)、白磁碁笥皿(図16－26)、上臼片(図17－52)などが出土する。

(2) 北側出入り口（図5、図版4．5）

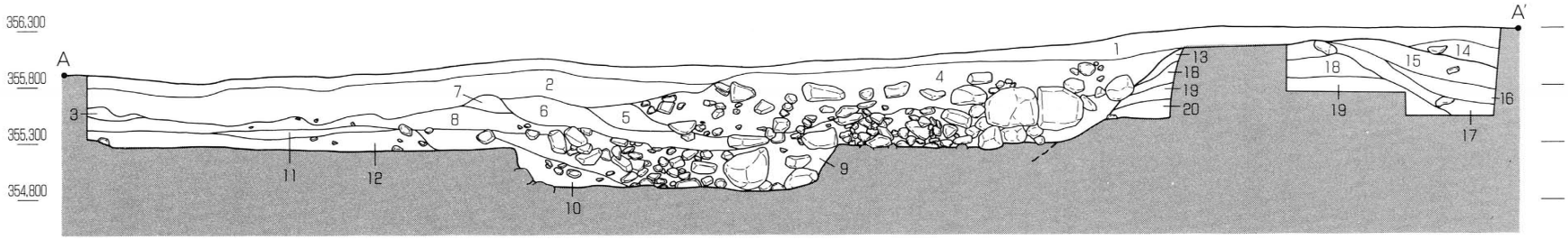
高さ1.16～1.84m、長さ19.28mにわたり構築された天守台北面石垣に開口する。中央やや東寄りに設けられ、開口部には石垣構築材が崩落していた。間口2.36mを測り、袖石垣が約4mにわたり残存していた。

調査では長さ5m、6段の石段を検出している。最下段踏石は天守台の石垣面と揃えて構築され、6段目踏石が不明瞭となる以外、各段の踏石は比較的よく残存していた。1段目踏面の幅は1.48m、2段目幅が1.00mと広く、他は0.80m程であり、段差も4段目が0.38mを測る以外、0.12～0.26mとなる。各段の踏面は礫が敷き詰められた状態であり、1、3段目の踏面には、袖石垣に接して礎石状の扁平な礫が据え付けてある。

最下段踏石の下層より石列が検出された。土層堆積からは(図4)、天守台構築に際し主郭土塁の天端までいっきに盛土された状況が観察でき、「天守平場」に時期差がうかがえる文化面は確認できない。時期をたがえる遺構とは考えられず、石垣基底部構築にかかわる遺構、あるいは普請中での設計変更と推量される。

東側袖石垣が1～2石、高さ約0.60m残存するのに対し、西側袖石垣は高さ1.42mが残る。幅0.50～0.80mの野面石を用い築み上げ、間詰石を多用している。反りは認められず、築石部は67～75度、隅角部は79度と急角度となる。基底部まで掘り下げた隅角部は、高さ2.08m、5石が確認できた。基底部から約0.60m上層、2石目が旧地表面となる。現地表から0.08m下層に根固めの小礫が集中していた。

遺物は石段上からかわらけ片が数点出土している以外、石垣基底部の掘り下げに際し、かわらけ(図15－12)、瀬戸美濃産擂鉢(図16－38)が出土する。青磁香炉(図16－25)が、小片となって周辺一帯から表採できた。



1. 黒　色　土　層　表土、腐植土となる。
2. 茶 褐 色 土 層　小礫を含み、黄褐色土粒が混る。締りややあり、根の混入が著しく、腐植化する。
3. 暗 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含む。黄褐色土粒が僅かに混る。締りややあり。
4. 混礫褐色土層　焼土・炭化物を含み、黄褐色土粒が混る。下層に礫が多く堆積する。礫間に土砂の混入が見られない箇所がある。
5. 暗 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含み、黄褐色土が班状に混入する。締りややあり、粘性あり。
6. 黒 褐 色 土 層　焼土・炭化物を含み、砂粒・小礫が混る。黄褐色土が班状に混入する。締りややあり、粘性あり。
7. 茶 褐 色 土 層　6層と同一層か。砂粒・小礫を含む。
8. 黒　色　土　層　砂粒を含み、焼土粒・炭化物が僅かに混る。部分的に小礫・黄褐色土が多く班状に堆積する。締りややあり、粘性あり。
9. 混 礫 褐 色 土 層　多量の礫が混入する。礫間に土砂の混入が見られない箇所がある。焼土粒・炭化物・黄褐色土が混る。
10. 黒 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含み、黒色土・黄褐色土粒が班状に混る。締りあり、粘性あり。
11. 暗 黄 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含み、黒色土粒が混る。よく締り、緻密、粘性あり。
12. 黄褐色粘質土層　砂粒・小礫を含み、焼土粒・炭化物が混る。よく締り、緻密、粘性強い。
13. 茶褐色粘質土層　砂粒・小礫を僅かに含み、黄褐色粘質土が班状に混る。土塁被覆層となる。
14. 暗 黄 褐 色 土 層　砂粒・小礫を多く含む。締りややあり。根の混入が著しく腐植化する。
15. 褐 色 粘 質 土 層　小礫を含み、黄褐色土・黒色土粒が混る。よく締り、粘性強い。
16. 黒褐色粘質土層　砂粒・小礫を多く含む。焼土粒・炭化物が混る。よく締り、緻密、粘性強い。
17. 黒 褐 色 土 層　小礫を多く含み、黄褐色土が多量に混る。締りあり、粘性あり。
18. 黒 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含み、黄褐色土が混る。締りあり、粘性あり。
19. 暗褐色粘質土層　砂粒・小礫を含み、黄褐色土が班状に混る。締りあり、粘性あり。
20. 暗 黄 褐 色 土 層　砂粒・小礫を多く含む。非常によくつき固められている。この層土塁内石積みを境に西側のみに堆積する。

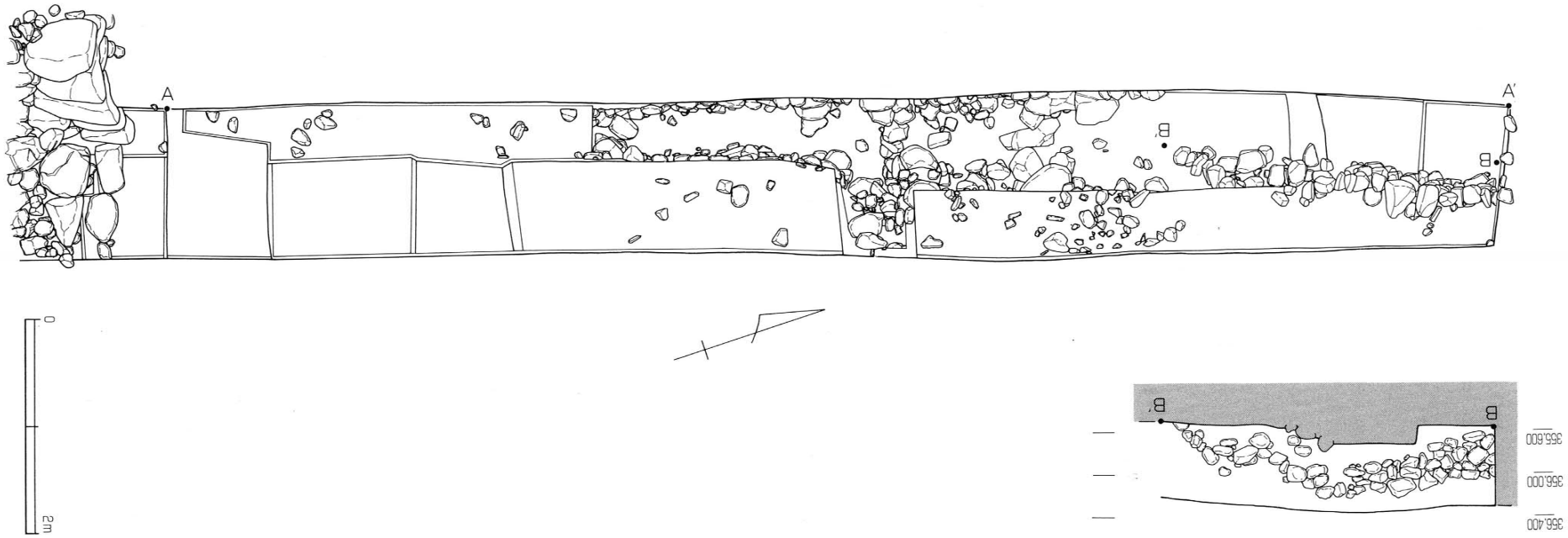


図4　トレンチ1

(3) 西側出入り口（図６．７、図版６．７）

高さ1.16～1.80ｍ、長さ21.36ｍにわたり構築された天守台西面石垣に開口する。中央やや南寄りに設けられ、開口部に石垣構築材が崩落していた。間口2.56ｍを測り、最上段では3.56ｍと「バチ」状に広がる。袖石垣が約５ｍにわたり残存し、石段状を呈していた。天守台の上段、北側袖石垣の脇には0.82ｍ×0.80ｍ、厚0.20ｍ程の大形礎石が１枚残存していた。

調査により、出入り口には約1.9ｍ間隔で、長さ0.66ｍ、幅0.44ｍ程の礎石を２枚、間口より3.14ｍ奥側に高さ1.44ｍの石積みを確認している。間口周辺以外、小礫が敷き詰められた状態となるが、礎石周辺は硬化し、特に間口一帯はよく踏み固められていた。大形礎石も含め、都合３枚の礎石を検出したが、門跡など建造物の存在が推定される。

北側袖石垣は扁平な野面石を用い、高さ1.68ｍが現存する。間詰石を多用し、１ｍ以上にも及ぶ礫を用いている。反りは認められず、78～85度と急傾斜となる。隅角部は基底部まで掘り下げ、高さ1.14ｍ、３石が確認できた。基底部から約0.26ｍ上層が旧地表面となる。現地表から0.18ｍ下層に根固めの小礫が集中していた。

奥側の石積みは、袖石垣築造後に通路底から積み上げられ、0.50ｍ以下の小振りの石材を用いて構築されている。土層の堆積状況からは、①袖石垣の築造、②奥側の石積み構築、③その後に出入り口が埋められたことになる。

遺物はかわらけ片が数点(図15－８～10)出土した以外、常滑甕(図16－46)が出土する。常滑甕は小片となって、天守台西側一帯から集中して検出されている。

(4) 天守平場西側集石（図７、図版３）

「天守台」北西隅から西側出入り口にかけて長さ約16ｍ、幅１ｍにわたり小礫の集中が見られた。天守台石垣の崩落に際し、流失した裏グリ石と推量していたが、築石の混入が極めて少ないこと、石垣基底部に見られず、距離をおき一定の幅で集中していることなどから遺構と扱った。

一部を断ち割り堆積状況を確認した。拳大から径0.30ｍ程の礫が、断面半円形に集中・堆積していた。厚さ0.16ｍ程となるが、搗き固められている状況は確認できなかった。通路状に一定幅で検出されるが、「天守台」北西隅では、流失した裏グリ石と見分けが困難となり、以後、その範囲は不明瞭となる。機能・性格など定かになしえなかった。

遺物は瀬戸美濃陶器・常滑甕(図16－39～42)が出土する。常滑甕は小片となって、天守台西側一帯から集中して出土している。

(5) 石　垣

①石垣１（図８、図版２）

天守台南側、主郭土塁に貼り付く東面石垣であり、石垣２の構築後に築かれる。石積み下半に孕みが見られ、南端は崩され積み直されている。幅5.50ｍ、高さ2.80ｍを残すのみであり、野面石を使用し、長径0.30～1.20ｍ程の礫を用いるが、多くは径0.80ｍ以下である。割り石や人為的な加工を施した礫は確認していない。反りはなく、勾配は62度である。

②石垣２（図９、図版１）

天守台南面の石垣である。石垣３とともに館跡に残る石積みでは最大規模となる。隅角部は大きく崩落するが、幅32.04ｍ、高さ7.60ｍを測り、天端付近まで良好に残っている。石材は安山岩・花崗岩の野面石を使用し、築石は長径0.40～１ｍ程、間詰石は径0.10～0.30ｍ程の礫を用いる。割り石や人為的な加工を施した礫は確認していない。西方土塁側は

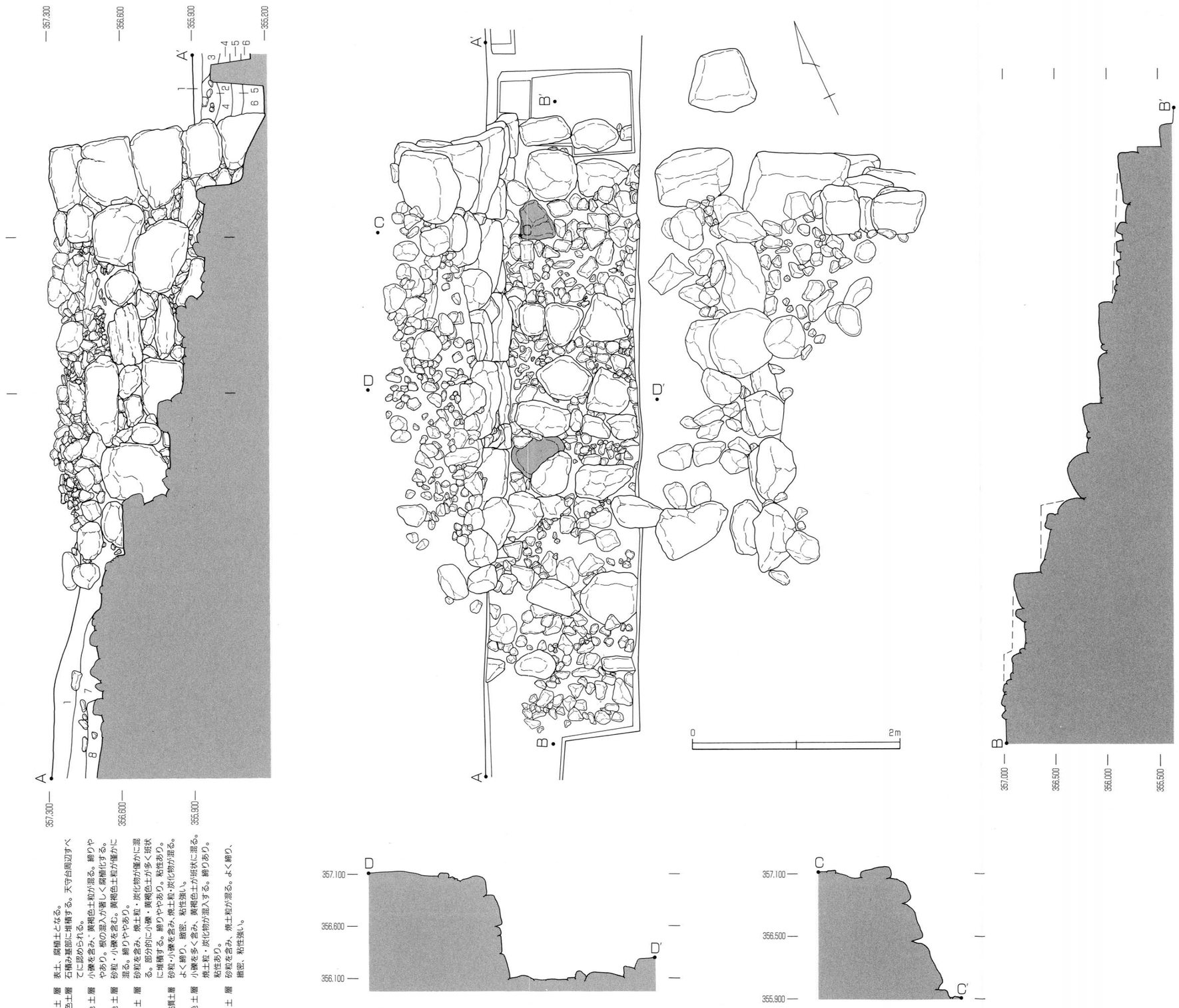


図5　天守北側出入り口部

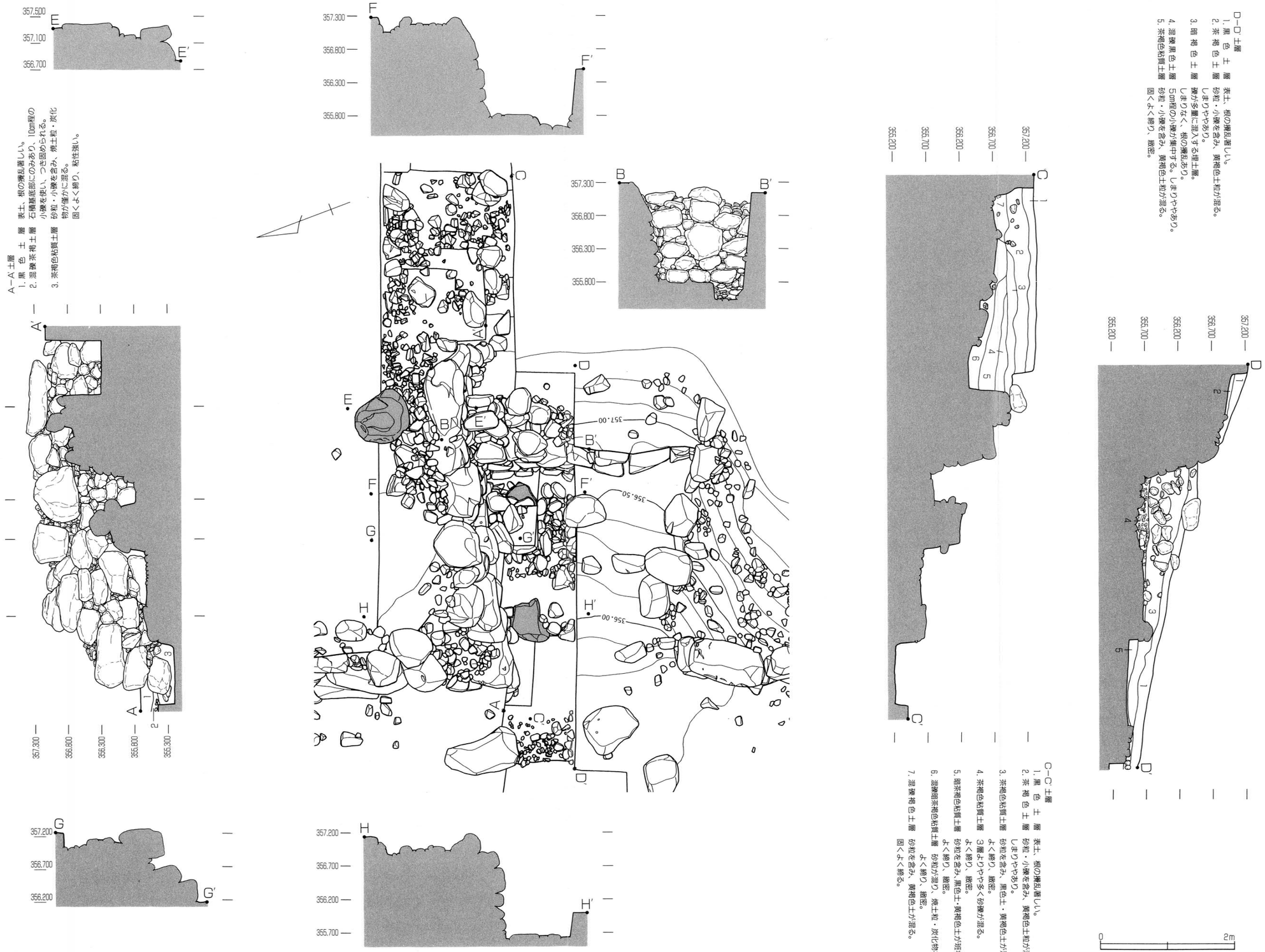
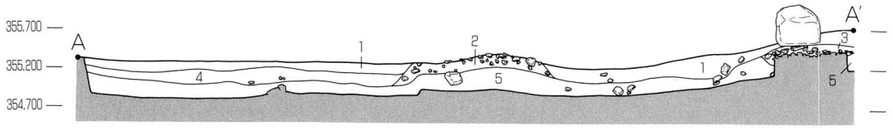
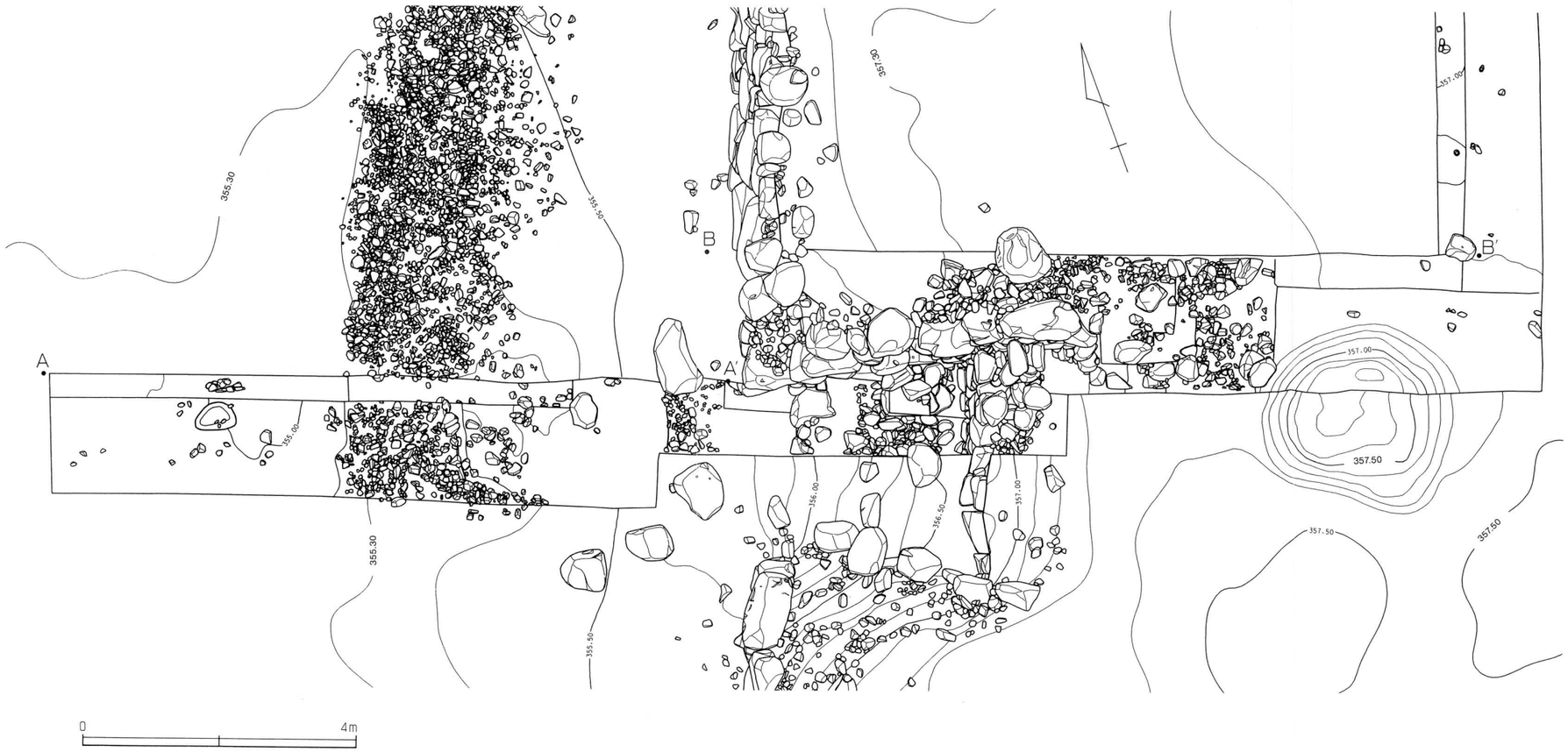
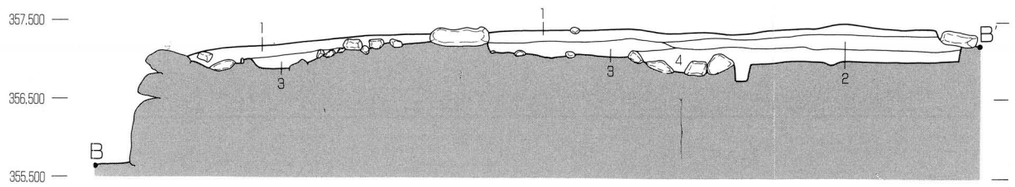


図6 天守西側出入り口部（1）



1. 黒　色　土　層　表土、根の攪乱著しい。
2. 混 礫 黒 色 土 層　5～20 ㎝程の礫が集中する。根の攪乱著しい。
3. 混礫茶褐色土層　石積基底部にのみあり、10 ㎝程の小礫を使いつき固められる。
4. 暗 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含み、黒色土・黄褐色土粒が混る。締りややあり、粒性あり、根の進入あり。
5. 茶褐色粘質土層　砂粒・小礫を含み、焼土粒・炭化物が僅かに混る。固くよく締り、粘性強い。





1. 黒　色　土　層　表土、木根の混入著しい腐植土。
2. 黒 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含み、黄褐色土粒が混る。木根の混入著しく、腐植化する。
3. 茶 褐 色 土 層　砂粒・小礫を含み、焼土粒・炭化物が混る。締りややあり、粘性あり。
4. 暗 褐 色 土 層　小礫を多く含み、黄褐色土が斑状に混る。焼土粒・炭化物が混入する。粘性・締りあり。

図7　天守西側出入り口部（2）

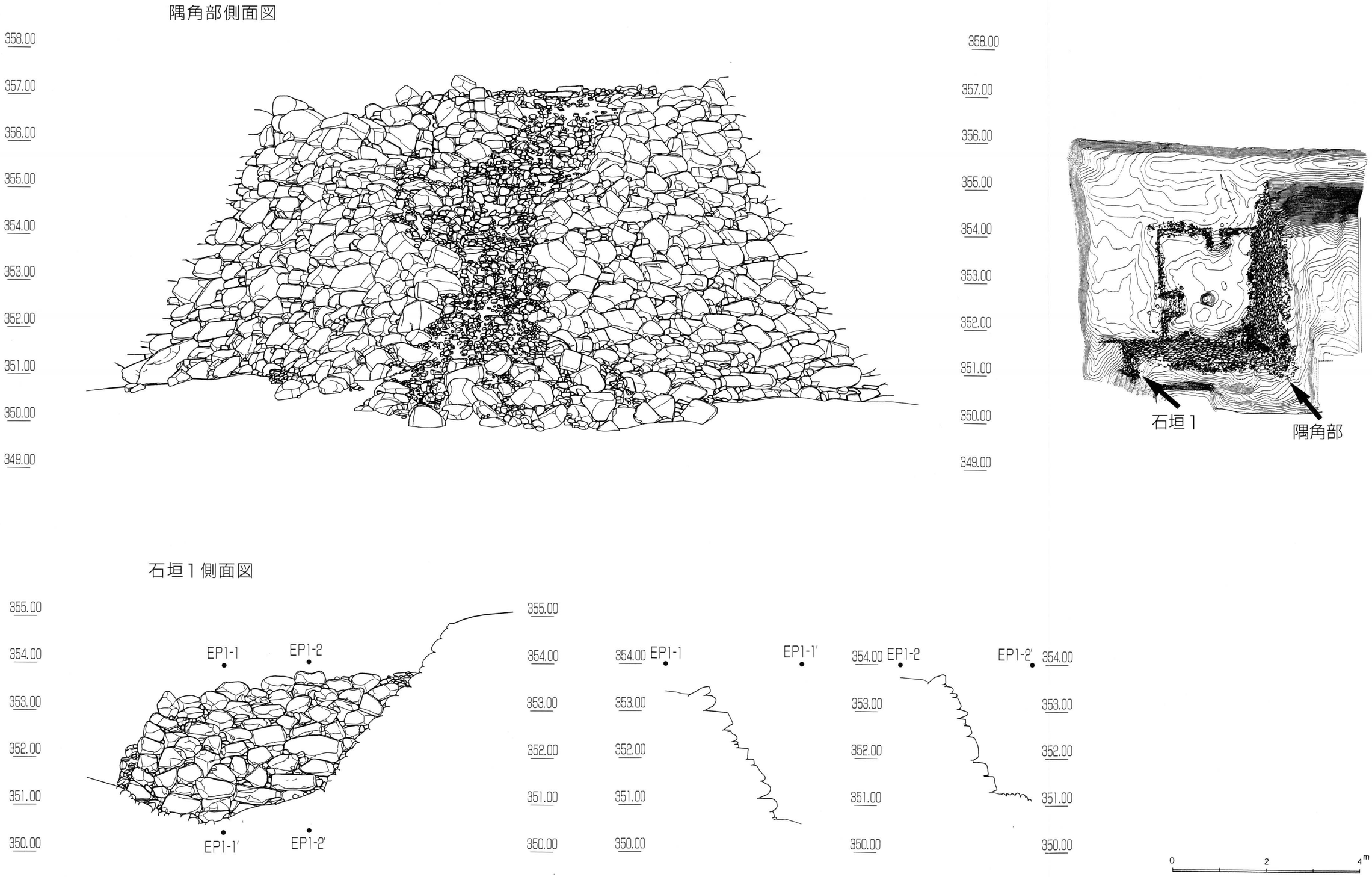


図８　天守台石垣１・隅角部側面図

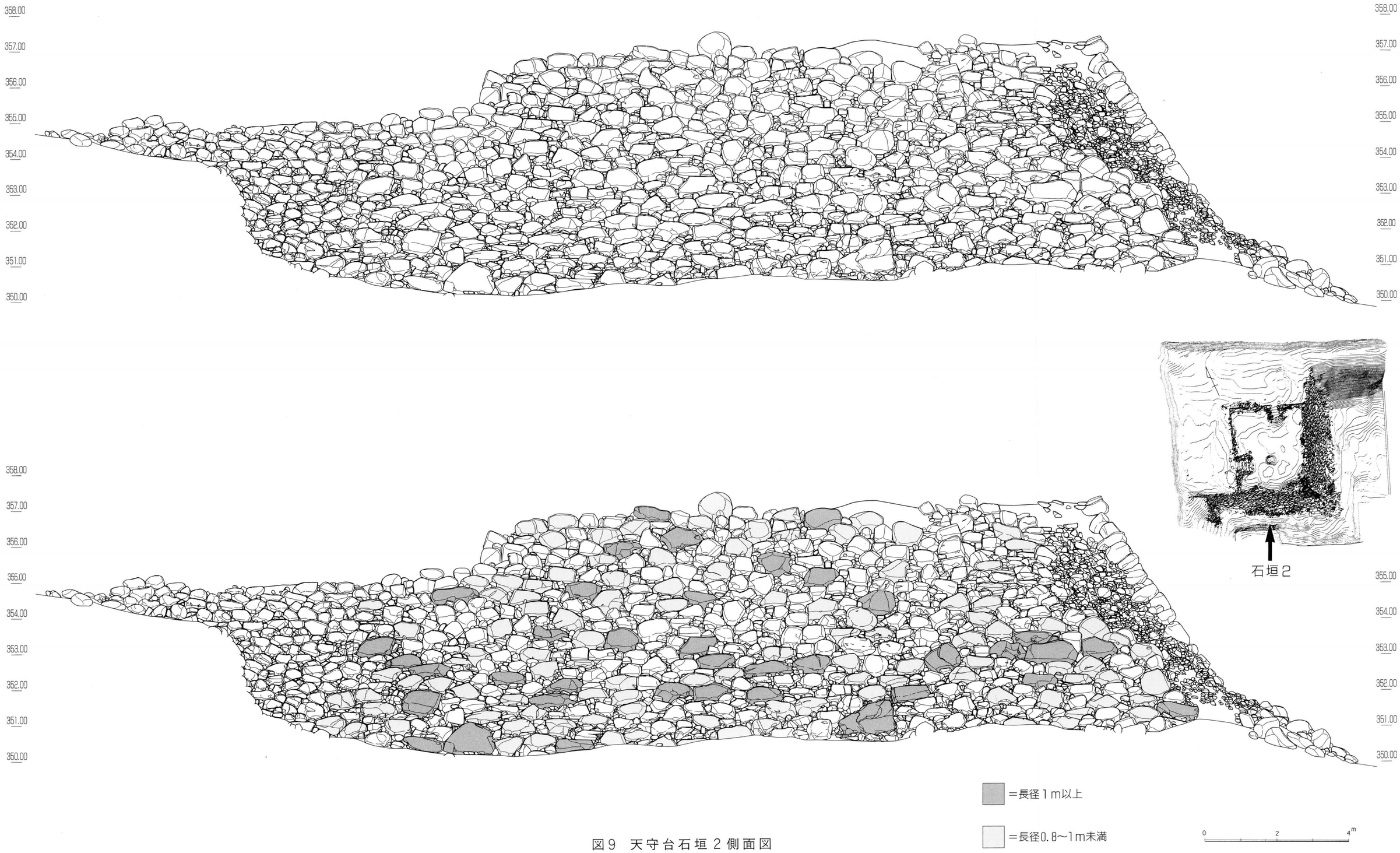


図9　天守台石垣2側面図

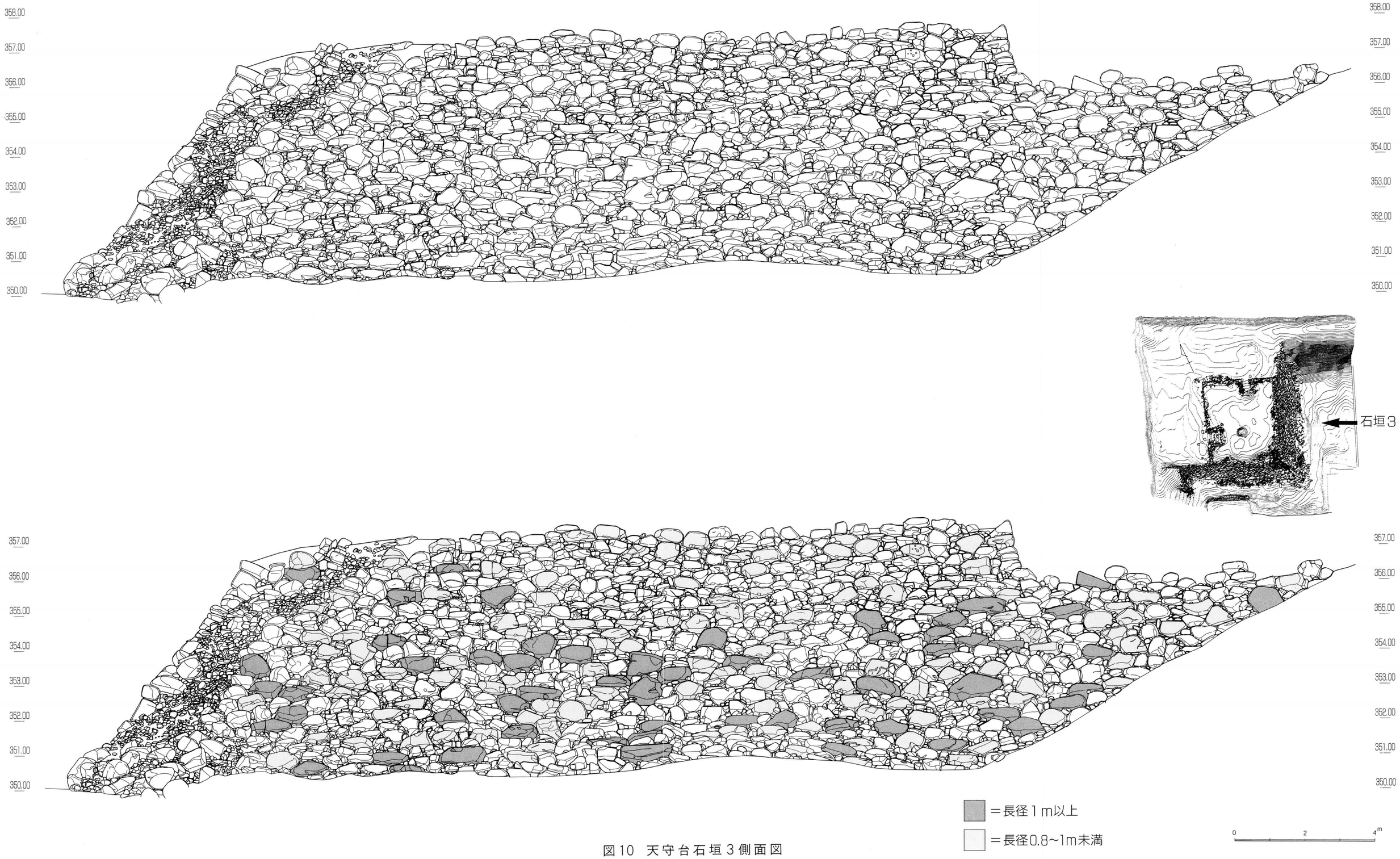


図10　天守台石垣3側面図

やや小振りな築石であるが、それ以外、天端付近にまで１ｍを超える礫を積み上げている。高さ５ｍ程を境に上半は62度、下半は55度と、勾配が若干異なる。

③石垣３（図10、図版１）

天守台東面の石垣である。石垣２とともに高石垣となり、幅32.40ｍ、高さ7.16ｍを測る。中央下半の石積みは前面にせり出し、孕みが見られる。石垣２と同様、石材は安山岩・花崗岩の野面石を使用し、同規模の築石・間詰石を用いる。割り石や人為的な加工を施した礫は確認していない。表面１ｍ以上に及ぶ礫も石垣全体にわたり用いられている。高さ５ｍ程を境に上半は63度、下半は52度と、勾配が若干異なる。

④石垣４（図11）

天守台北面の低石垣である。幅19.35ｍ、高さ1.20～1.80ｍを測り、中央東寄りに出入り口を設けている。一部崩落箇所が見られるが、天端付近まで良好に残っている。石材は安山岩・花崗岩の野面石を使い、長径0.30～１ｍ以上に及ぶ礫を用いる。割り石や人為的な加工を施した礫は確認していない。反りはなく、垂直に積み上げられる。

⑤石垣５（図11、図版３）

天守台西面の低石垣である。幅21.40ｍ、高さ1.15～1.60ｍを測り、中央南寄りに出入り口を設けている。出入り口部が崩落する以外、天端付近まで良好に残る。石材は安山岩・花崗岩の野面石を使い、石垣４に比べ巨石を多く用いている。割り石や人為的な加工を施した礫は確認していない。反りはなく、垂直に積み上げられる。

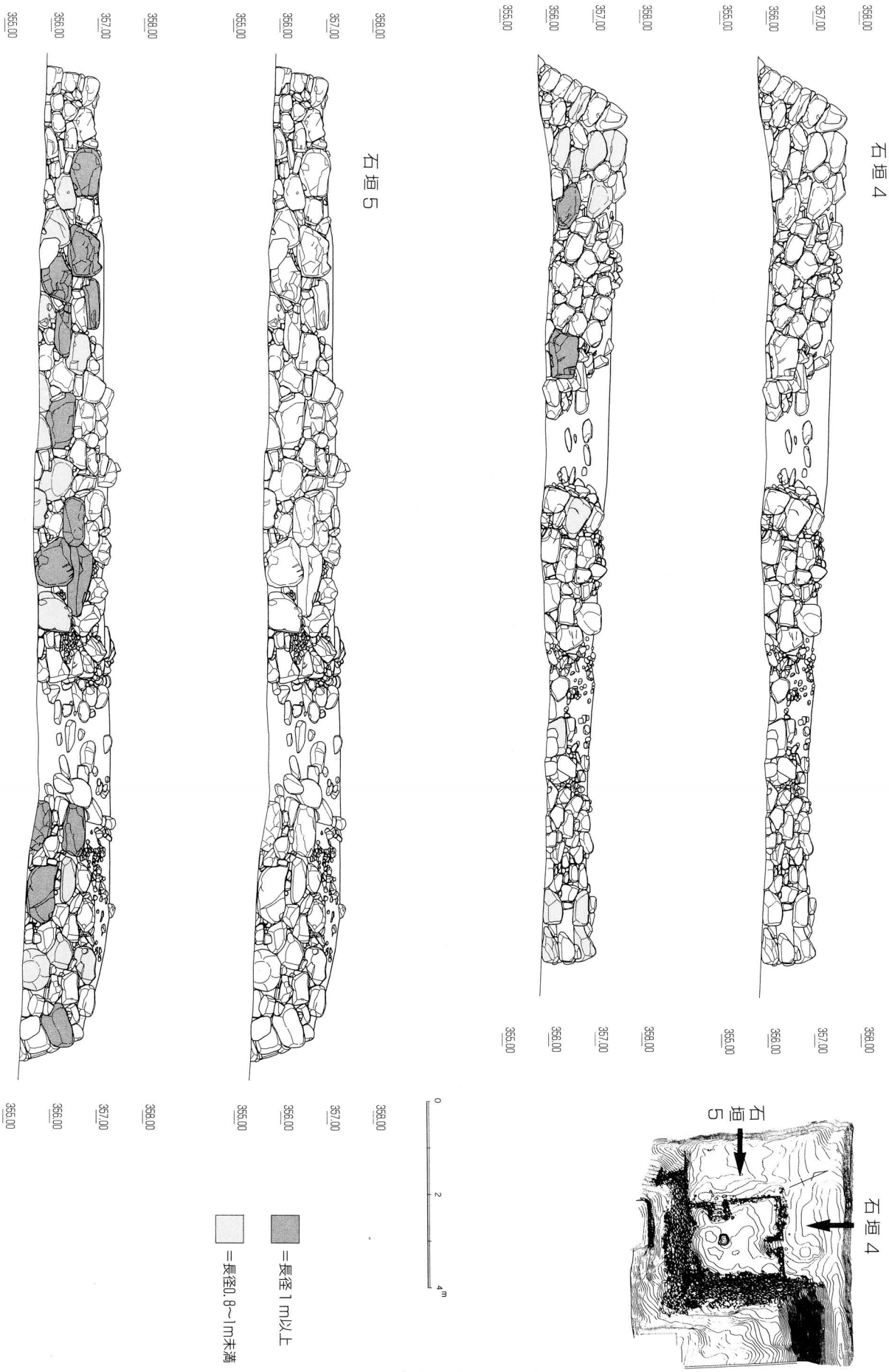


図11　天守台石垣4・5側面図

第２節　小　　括

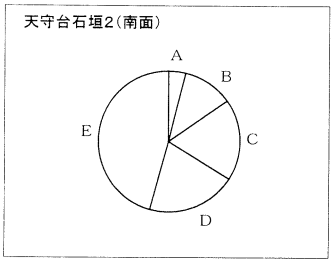
平成７年の調査開始以来、館内から様々な石積みが確認されており、すでにこれら多様な石積みを四分類する試案が提示され、天守台の南面・東面石垣とともに主郭大手土橋の南面石積みは、控えを設けず積み上げられた高石垣（石積み）として、最終期に位置づけられている。通説でも天守台石垣・大手土橋の石積みは、ともに武田氏滅亡後の館再整備に際し構築された遺構と評価されている。ここでは天守台石垣の表面観察・資料化を通じ気づいた点を報告しておく。

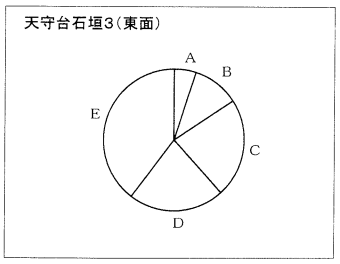
①石材

ア）加工の程度

調査の過程でほぼ全ての石材を観察したが、安山岩・花崗岩の自然石のみを使用し、高石垣となる南面・東面石垣だけでなく天守台全体から割石や加工を施した石材は全く確認できなかった。用材に用いられた安山岩・花崗岩はともに近隣より産出し、構築材は地元産石材を使用する。

表１　石材寸法別構成比（１）





	寸　法	個数	比率
A	１m以上	39	3.94%
B	0.8～１m未満	112	11.32%
C	0.6～0.8m未満	183	18.50%
D	0.4～0.6m未満	201	20.32%
E	0.4m未満	454	45.90%
	総数	989	

	寸　法	個数	比率
A	１m以上	57	4.93%
B	0.8～１m未満	125	10.83%
C	0.6～0.8m未満	261	22.61%
D	0.4～0.6m未満	252	21.83%
E	0.4m未満	459	39.77%
	総数	1154	

イ）法量と形状

幅32m、高さ７～８ｍを測る石垣は大小不定形な石材が用いられている。表面（外面）のみの観察であるが、築石は長径0.40～１ｍ程、間詰石は径0.10～0.30ｍ程の法量となる。石材は横長・方形・球状・多角形など多様な形状となり、使用される石材の寸法別構成比を見ても規格化への意識は乏しい結果となる（表１）。

②積み方

ア）隅角部

高石垣となる部分は崩落のため明らかでないが、高さ２ｍ程の低石垣となる箇所では、いずれの角石も、規模・形状ともに築石となんら変わらない用材が使用される。西側出入り口部を除き、算木積みあるいは角石の左右への引きも認められず、重箱積み状となり縦目地が通る。

イ）築石部

築石どうし合端は「二番」で合わせ、各石材の長辺を水平に据えるよう配石し、横目地が部分的に通る。石垣面に長径１ｍを超える不定形な石材を自由に配石するが、南面石垣の西側には、やや小振りな用材が目立っている。土塁に張り付き設けられた石垣１の構築とも関わり、この部分は補修などの可能性もあろう。大きさが際立ち「鏡石」とでも呼ぶべき築石は南面石垣の下端に僅かに認められる。

③勾配

高さ２ｍ程の低石垣となる箇所は、いずれも90度に近い急角度となり、反りはなく勾配のみで築かれている。高石垣となる南・東面では、高さ５ｍ程を境に上半は62～63度、下半は52～55度と、勾配

表2 石垣勾配表　　石垣２（南面）　　（ ）＝崩落・孕み箇所

高さ＼EPポイント	EP2－1	EP2－2	EP2－3	EP2－4	EP2－5	EP2－6	EP2－7	EP2－8	EP2－9	EP2－10	EP2－11	EP2－12	EP2－13
6～7m						75°	74°						
5～6m				69.5°	71°	65.5°	66°	66.5°	67.5°	70.5°			
4～5m	58°	66.5°	73.5°	68°	59°	65°	61°	64.5°	78.5°	68°	70.5°		
3～4m	56.5°	59.5°	55.5°	56.5°	57°	(55°)	(63.5°)	55°	52°	56.5°	62.5°	63.5°	
2～3m	61.5°	57.5°	52°	55°	60°	(55°)	58°	(58°)	(58°)	(68°)	(62°)	(61.5°)	(60°)
1～2m	(47°)	52°	52°	48°	43.5°	44°	49°	54.5°	(59°)	54.5°	56.5°	53°	63°
0～1m	(60°)	44°	44.5°	52°	51°	49°	55°	(41.5°)	45°	50.5°	51.5°	53°	52°

石垣３（東面）　　（ ）＝崩落・孕み箇所

高さ＼EPポイント	EP3－1	EP3－2	EP3－3	EP3－4	EP3－5	EP3－6	EP3－7	EP3－8	EP3－9	EP3－10	EP3－11	EP3－12	EP3－13	EP3－14
6～7m			59°	62.5°	68°	62°	68°	70°	64.5°	64°	62°			
5～6m		(71°)	59°	60°	59°	54.5°	58.5°	(53°)	(51°)	(52°)	60.5°			
4～5m	63°	58°	59°	60°	56°	(58°)	(56°)	(53°)	(52°)	(52°)	(52°)			
3～4m	63°	58°	59°	60°	56°	56.5°	(56°)	(54°)	(53.5°)	(54°)	(54.5°)	56.5°		
2～3m	56.5°	58°	61°	(57.5°)	(53°)	(61.5°)	(56°)	(58.5°)	(53.5°)	55°	54.5°	56.5°	54.5°	
1～2m	47.5°	(41°)	(52°)	(54°)	(41.5°)	(52.5°)	(59.5°)	(52°)	(53.5°)	51.5°	54.5°	56.5°	54.5°	60.5°
0～1m	(62.5°)	(55.5°)	(52°)	(62.5°)	(55°)	(34.5°)	(29°)	(27.5°)	(42°)	41.5°	48.5°	51.5°	54.5°	54.5°

が異なる。詳細に観察すれば、同一の石垣面でも隅角部・中央・土塁側、あるいは高さに応じて勾配に変化をもたせているようであり、土塁側から順次勾配は急角度となり隅角部に至り、同様に基底部から天端にかけて順次急勾配となっており、天端付近で反りを作り出している。一連の石垣面であっても一様な勾配は窺えない（表２）。

④正面性

天守台は主郭の最も奥まった地点に構築されており、上段に二つの出入り口が設けてあるものの、外観上、上段へ至る進入路は判然とせず、古絵図などからもその存在は確認できない。調査の過程でも明らかにすることは出来なかったが、上段の二箇所の出入り口についてどちらを正面と見なすべきかある程度の見通しが得られた。北・西側出入り口の調査状況を確認しておく。

ア）北側出入り口（図５）

北面石垣の中央やや東寄りに開口し、間口2.36ｍを測り、袖石垣が約４ｍにわたり残存する。長さ５ｍ、６段の石段を検出した。一部袖石垣の崩落は見られるものの、表土層を除去するだけで検出されている。

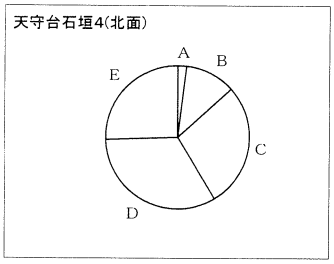
イ）西側出入り口（図６）

西面石垣の中央やや南寄りに開口する。間口2.56ｍを測り、最上段では3.56ｍと「バチ」状に広がり、袖石垣が約５ｍにわたり残存していた。出入り口には約1.9ｍ間隔で２枚の礎石を、上段からは大形の礎石を１枚検出しており、門跡などの存在が推測される。一方で、間口より3.14ｍ奥側には高さ1.44ｍの石積みが構築され、明らかに埋め戻されている状況が確認できた。

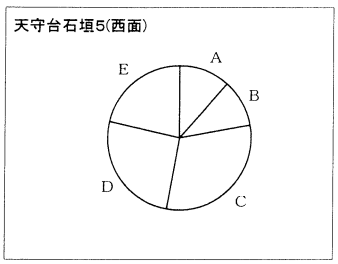
どちらの出入り口も規模的に大差ないが、進入方法・建造物の有無などの他、検出状況に違いが見られる。石積みの崩落以外、北側出入り口に人為的な廃絶状況が確認できないのに比べ、西側出入り口には、廃絶に際し石積みを構築し、最大で厚さ0.80ｍの埋土で覆うなど人為的に廃絶された状況が認められ、破城の痕跡と理解できる。

もう一点、出入り口が設けられた石垣の様態を比べると、長さ・高さなど形態上では大差ないものの、用いられた各石材規模に違いが見られる。北面石垣には、長径１ｍを超える用材は２点であるのに対し、西面石垣には13点の石材が確認できる（図11）。石材の寸法別構成比を比べても、西面石垣に大きさの際立つ用材がより多用されているのは明瞭である（表３）。

表３ 石材寸法別構成比（２）



	寸　法	個数	構成比
A	１ｍ以上	2	1.88%
B	0.8～１ｍ未満	12	11.32%
C	0.6～0.8ｍ未満	30	28.30%
D	0.4～0.6ｍ未満	35	33.01%
E	0.4ｍ未満	27	25.47%
	総数	106	



	寸　法	個数	構成比
A	１ｍ以上	14	11.57%
B	0.8～１ｍ未満	13	10.74%
C	0.6～0.8ｍ未満	37	30.57%
D	0.4～0.6ｍ未満	31	25.61%
E	0.4ｍ未満	26	21.48%
	総数	121	

外観上、西面石垣に「見せる」という意識が働いているのは明らかであり、西側出入り口は正面性を有する象徴的な空間であったと推定される。各地で確認されている「鏡石技法」と同様な評価が与えられよう。

天守台石垣の石材ほぼ全てが自然の野面石であり、加工することなく、不揃いのまま使用している。石材どうしは二番で合わせ、石尻を下げて据えるなどより安定する配石を行っている。石垣構築の初期段階で認められる技術であり、天端近くで僅かに勾配を起こし、反りを作り出すことなど一定の技法が確認できる。甲斐国領主がめまぐるしく交代した天正末年から文禄期にかけて構築された一事例であり、館跡に近世城郭へとつながる技法がいち早く導入されていることが認められる。

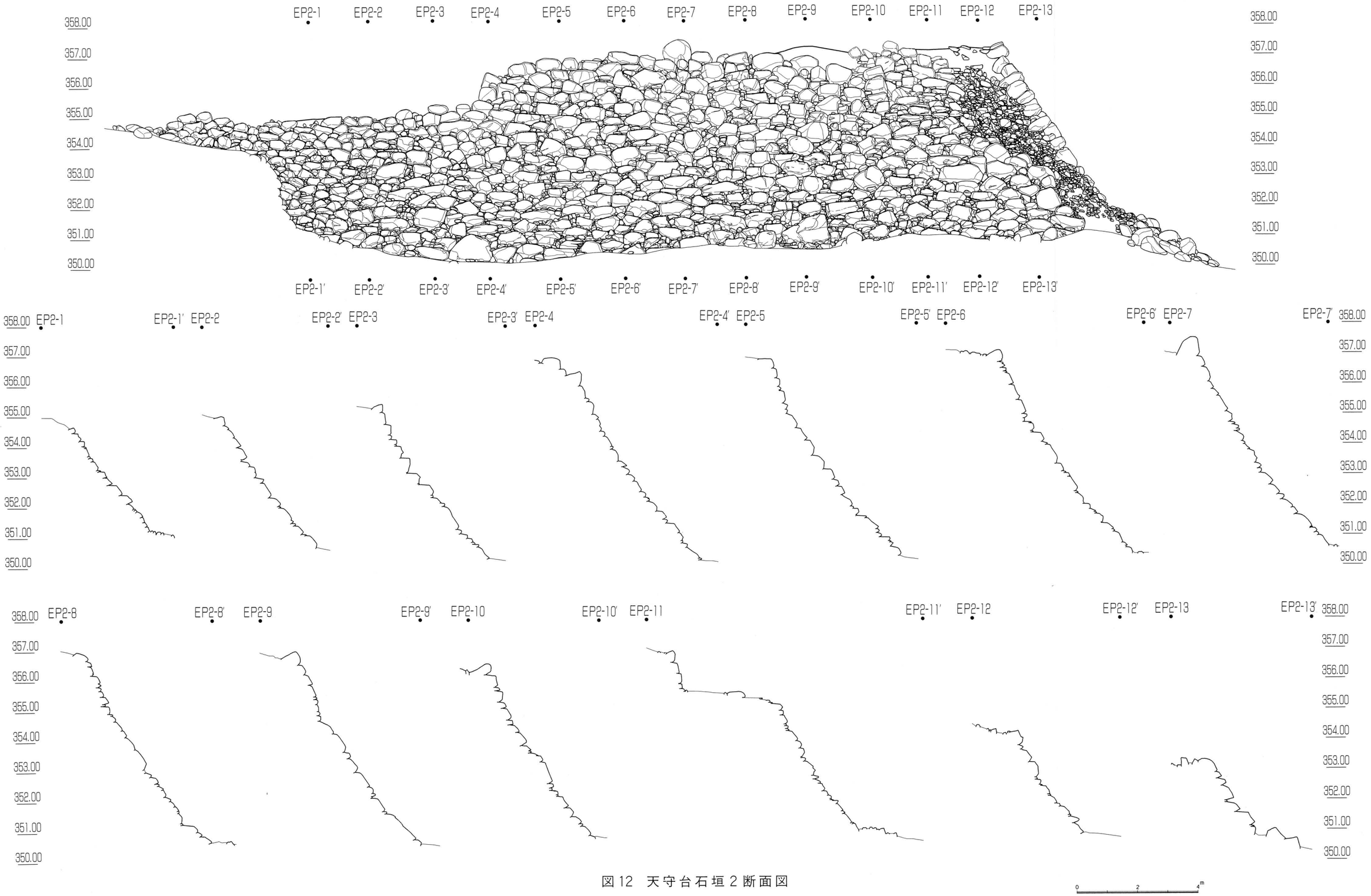


図12　天守台石垣2断面図

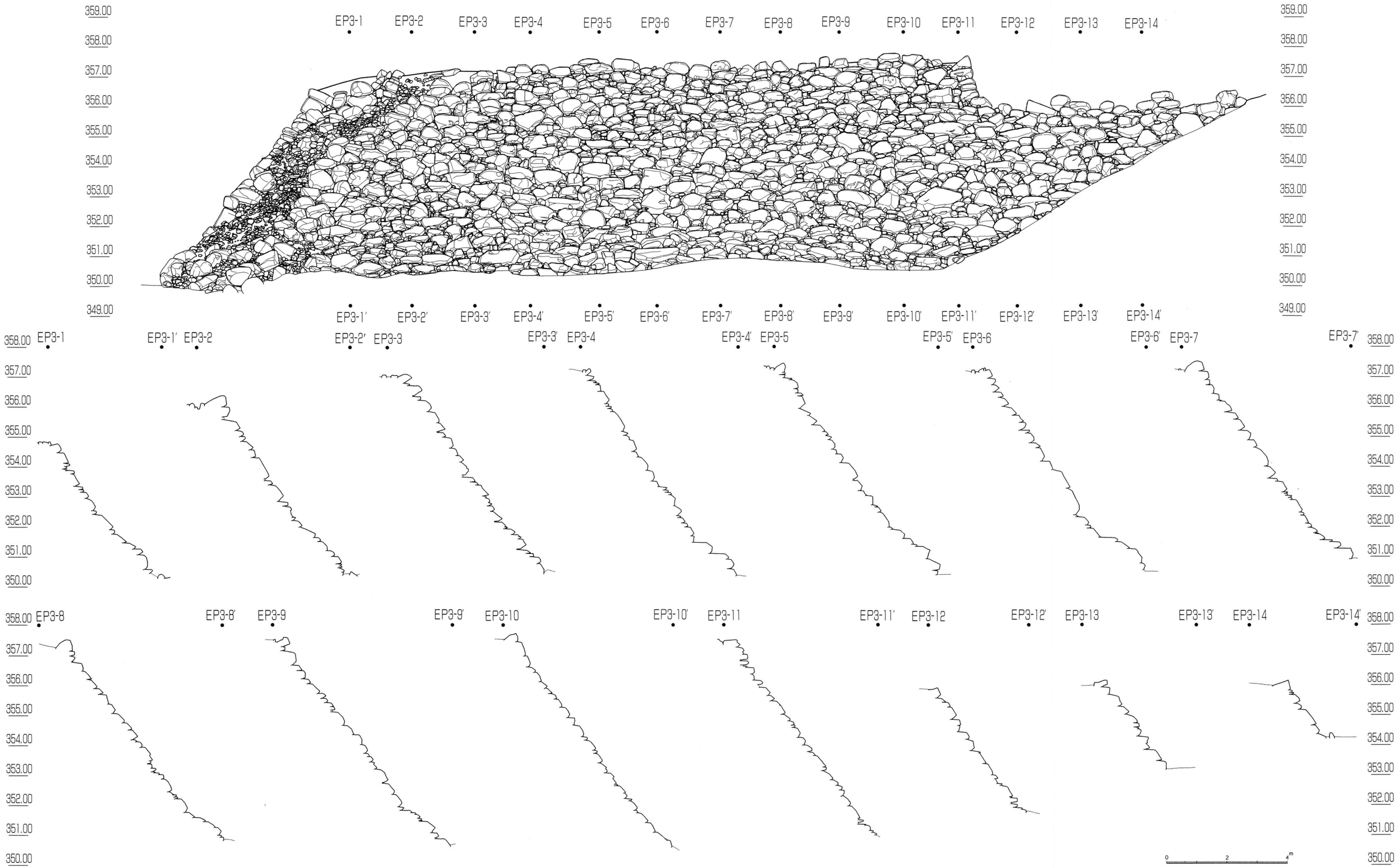


図13　天守台石垣3断面図

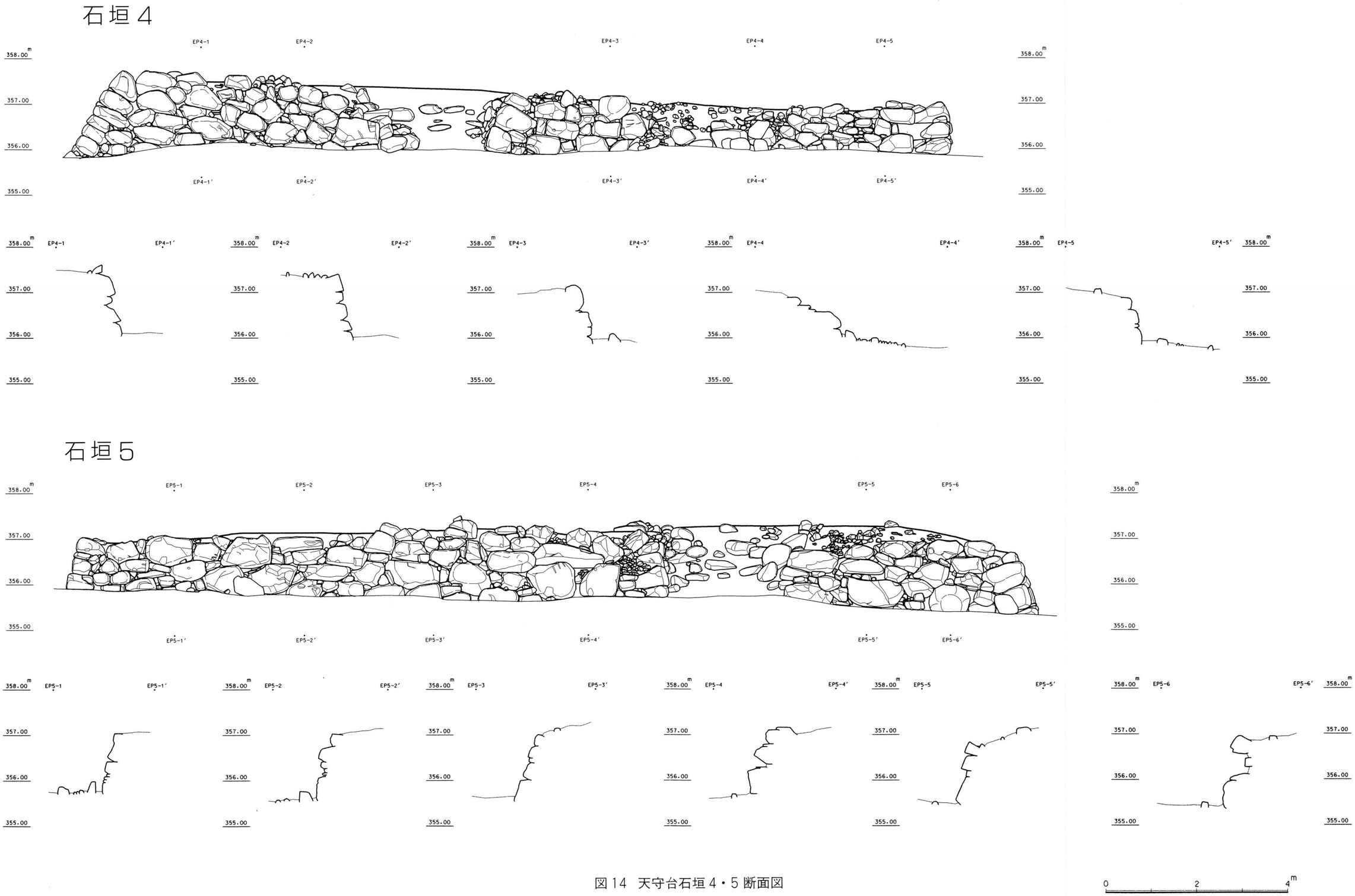


図14　天守台石垣４・５断面図

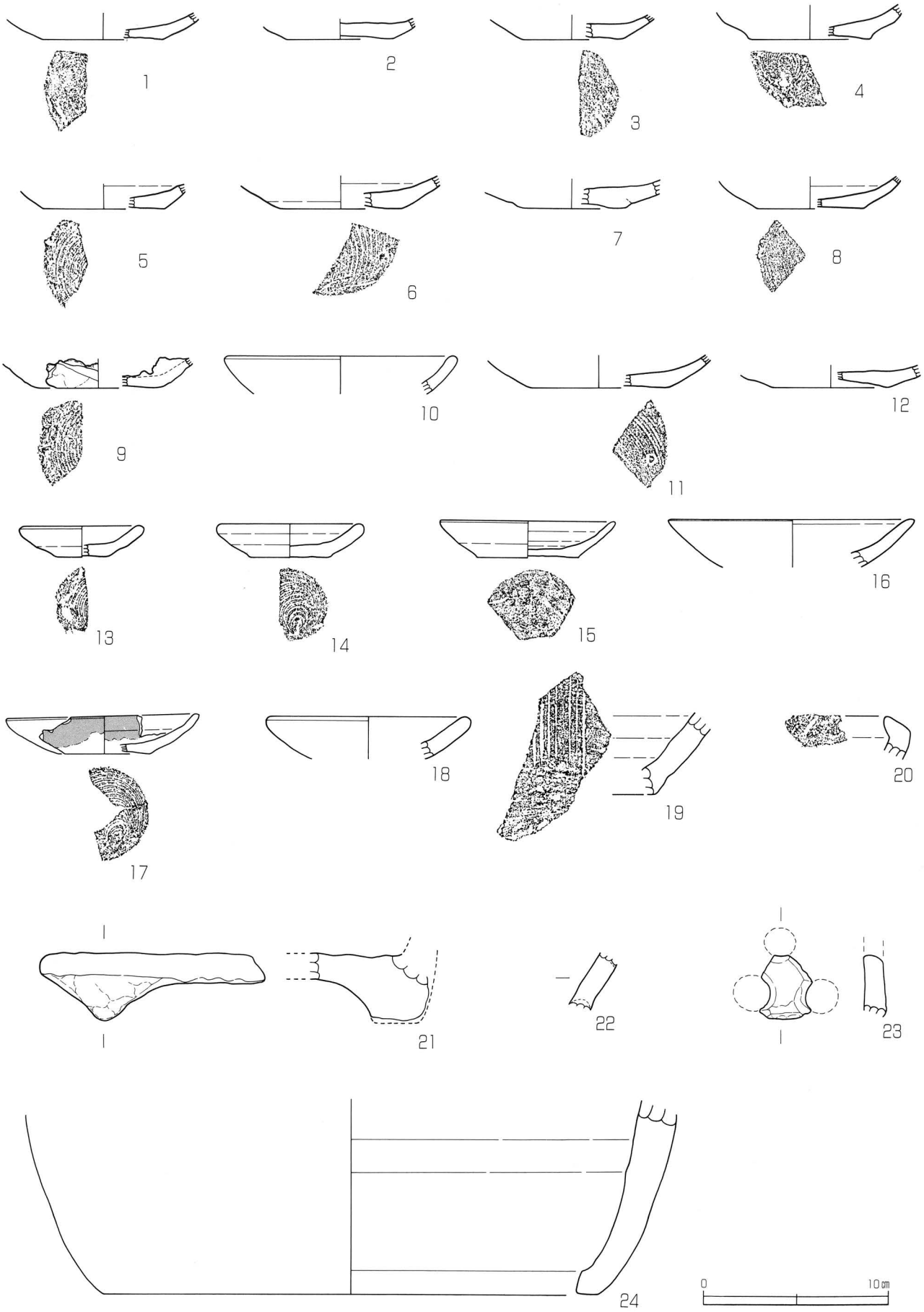


図15　遺物実測図（1）

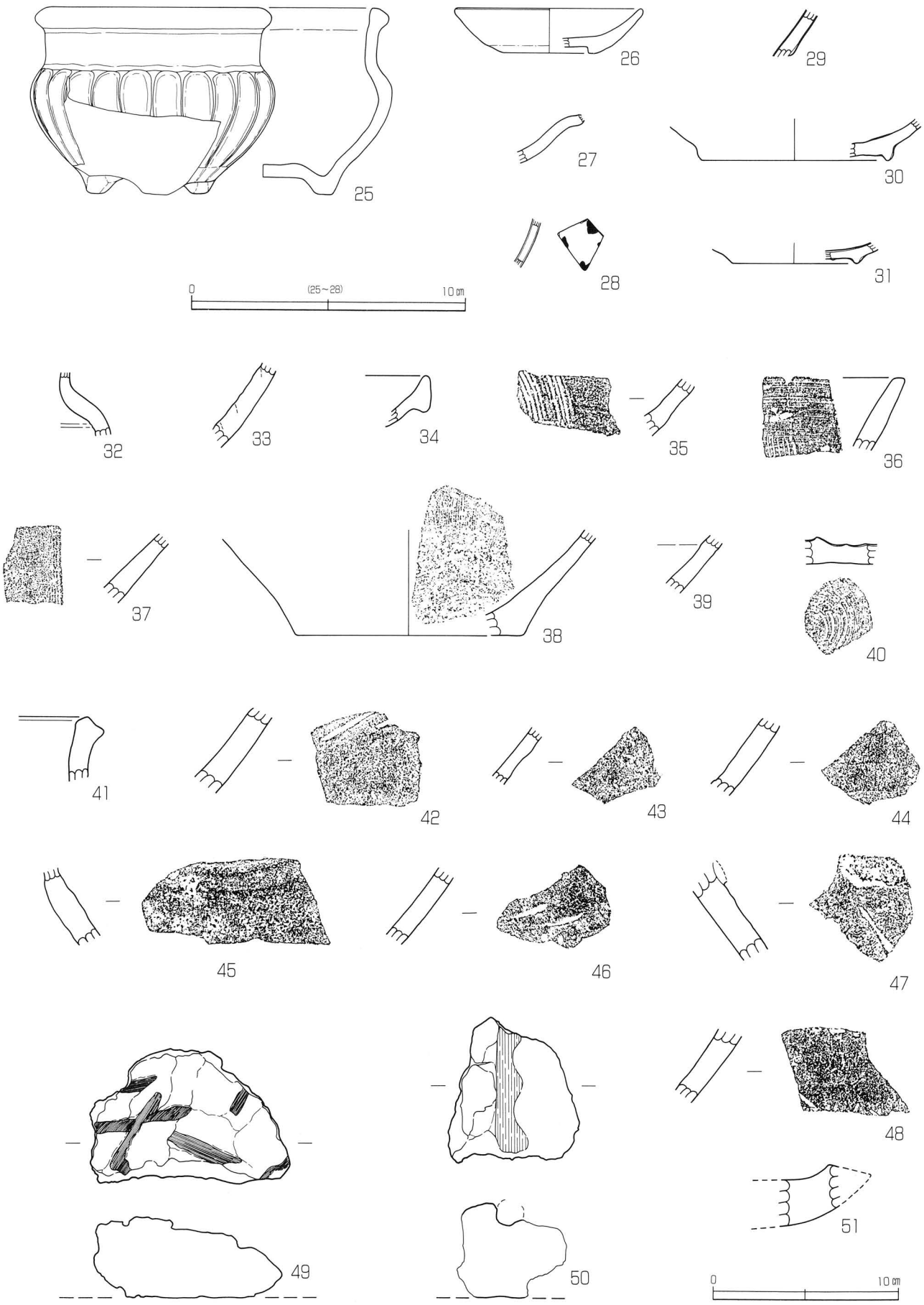

25
26
27
28
29
30
31
0
(25～28)
10㎝
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
10㎝

図16　遺物実測図（2）

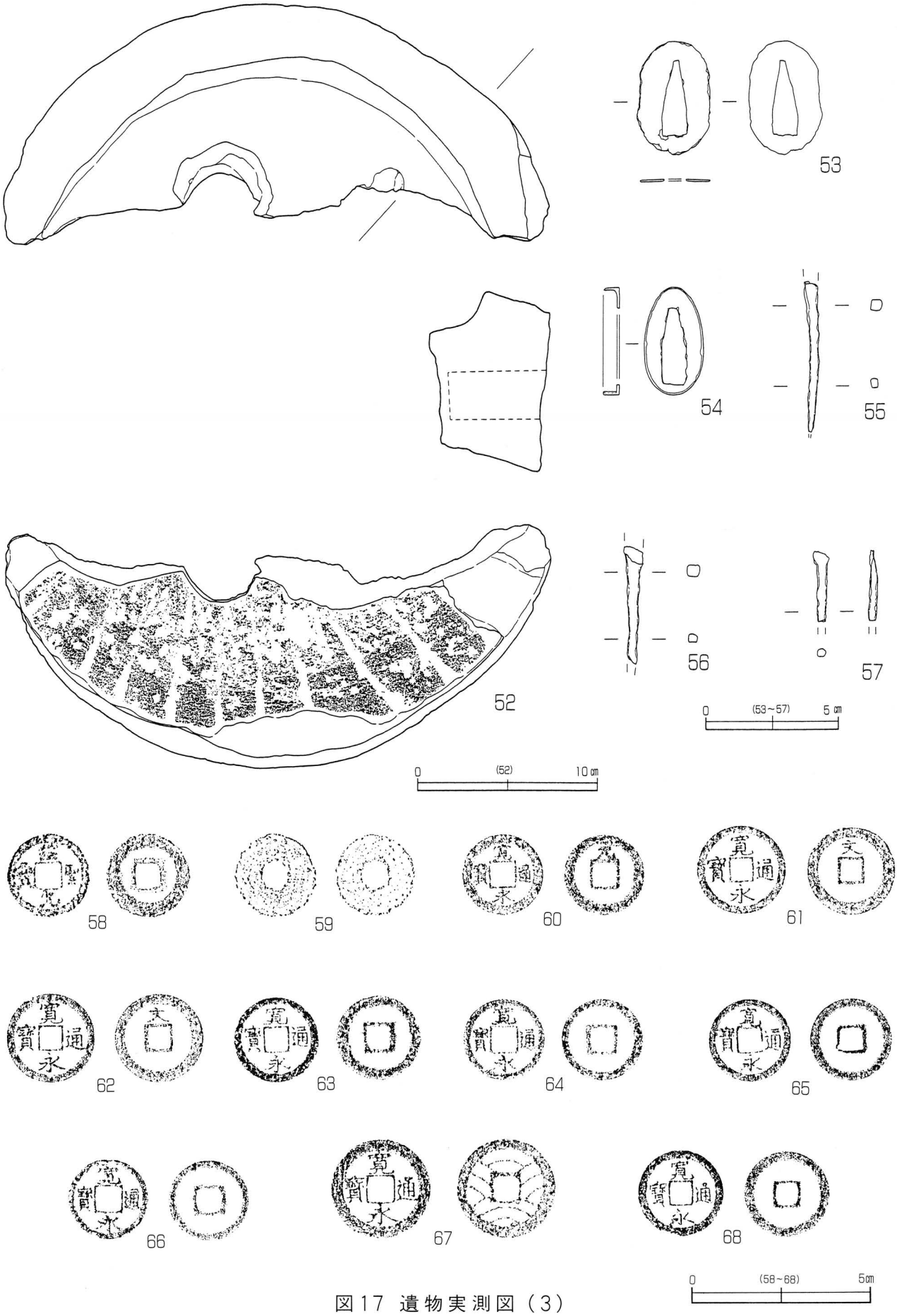

53
54
55
52
56
57
0 (53~57) 5cm
0 (52) 10cm
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0 (58~68) 5cm

図17 遺物実測図（3）

表４　土器・陶磁器観察表(1)

（　）復元値

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見（調整・文様・その他）	胎土	備考(時代等)
15	1	Ｔｒ－１ 天守台	土器　かわらけ			(6.6)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
15	2	Ｔｒ－１ 天守台	土器　かわらけ			(5.8)	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕磨耗	やや密	
15	3	Ｔｒ－１ 天守台	土器　かわらけ			(5.4)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	4	天守台	土器　かわらけ			(6.8)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	5	天守台	土器　かわらけ			(6.6)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	6	天守台	土器　かわらけ			(6.6)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
15	7	天守台 排土一括	土器　かわらけ			(6.0)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕磨耗	やや粗	
15	8	天守西側 出入り口部	土器　かわらけ			(5.8)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	9	天守西側 出入り口部	土器　かわらけ			(7.0)	体部 ～底部	ロクロ成形 被熱による瓦質化、溶融物付着	やや粗	
15	10	天守西側 出入り口部	土器　かわらけ	(12.2)			口縁部	ロクロ成形 被熱による瓦質化、溶融物付着	やや粗	
15	11	Ｔｒ－１ 礫層	土器　かわらけ			(7.6)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	12	Ｔｒ－１ サブトレ１	土器　かわらけ			(6.4)	体部 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕磨耗	やや密	
15	13	Ｔｒ－２ サブトレ２	土器　かわらけ	(6.2)	1.7	(3.2)	口縁 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	14	Ｔｒ－２ サブトレ２	土器　かわらけ	(7.5)	1.8	4.4	口縁 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	15	Ｔｒ－２ サブトレ１	土器　かわらけ	(9.5)	2.0	(5.6)	口縁 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
15	16	Ｔｒ－２ 天守平場	土器　かわらけ	(13.0)			口縁 ～体部	ロクロ成形	やや粗	
15	17	Ｔｒ－２ サブトレ２	土器　かわらけ	(10.2)	2.1	5.0	口縁 ～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 内外面スス付着	やや密	
15	18	表採	土器　かわらけ	(10.6)			口縁 ～体部	ロクロ成形	やや粗	
15	19	天守平場	土器　擂鉢				体部 ～底部		やや粗	
15	20	天守台	土器　火鉢				口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや粗	
15	21	天守平場 表採	土器　火鉢				底部		やや粗	
15	22	Ｔｒ－１ 天守台	土器　鉢				体部		やや密	
15	23	天守台	土器　火鉢				底部		やや粗	
15	24	Ｔｒ－１ 礫層	土器　火鉢			(27.0)	体部 ～底部	ロクロ成形	やや粗	
16	25	北側出入り 口部表採	青磁　香炉	7.4	6.9		口縁 ～底部		緻密	近代
16	26	Ｔｒ－１ 礫層	白磁　碁笥皿	(6.7)	1.7	(3.4)	口縁 ～底部		緻密	
16	27	表採	白磁　端反皿				口縁 ～体部		緻密	
16	28	Ｔｒ－１ 天守平場	染付　皿				体部		緻密	
16	29	Ｔｒ－２ 天守平場	瀬戸美濃　天目茶碗				体部	内外面鉄釉	やや粗	大窯期
16	30	Ｔｒ－２ 天守台	瀬戸美濃　皿			(10.1)	体部 ～底部	内外面灰釉、見込み部釉剝ぎ 付高台、輪ドチ痕	やや粗	大窯２
16	31	天守台 排土一括	瀬戸美濃　皿			(6.8)	底部	内外面灰釉、付高台、輪ドチ痕	やや密	大窯３
16	32	Ｔｒ－２ 天守平場	陶器　壺					外面鉄釉	やや密	
16	33	表採	陶器　壺				体部	外面鉄釉	密	
16	34	Ｔｒ－２ 硬化面	瀬戸美濃　擂鉢				口縁部	内外面錆釉	やや密	大窯２
16	35	Ｔｒ－１ 天守台	瀬戸美濃　擂鉢				体部	内外面錆釉	やや粗	
16	36	天守台表採	瓦質　擂鉢				口縁部		やや粗	
16	37	天守台表採	瀬戸美濃　擂鉢				体部	内外面錆釉	やや粗	
16	38	Ｔｒ－１ サブトレ１	瀬戸美濃　擂鉢			(12.4)	体部 ～底部	内外面錆釉	やや粗	
16	39	天守西側 平場集石	常滑　甕				体部		やや粗	
16	40	天守西側 平場集石	瀬戸美濃					ロクロ成形、底部回転糸切り 内面錆釉	やや粗	
16	41	天守西側 平場集石	常滑　甕				口縁部		やや粗	
16	42	天守西側 平場集石	常滑　甕				胴部		やや密	

表5　土器・陶磁器観察表(2)

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm)			部位	観察所見（調整・文様・その他）	胎土	備考(時代等)
				口径	底径	器高				
16	43	天守台	常滑　甕				胴部		やや密	
16	44	Ｔｒ－２ 天守台	常滑　甕				胴部		やや密	
16	45	天守台西側	常滑　甕				肩部		やや粗	
16	46	Ｔｒ－２ 出入り口部	常滑　甕				胴部		やや密	
16	47	表採	常滑　甕				口縁部		やや粗	
16	48	天守平場 表採	常滑　甕				胴部		やや密	

表6　壁土観察表

図	番号	出土位置	種　別	下地材		下地組み	壁　厚 ( )推定値	備　　考
				種類	幅			
16	49	天守西側 平場	壁土					
16	50	Ｔｒ－１ 天守台	壁土	丸木	1.0	木舞一重桟ヵ	(7.0)	

表7　石器観察表

図	番号	出土位置	種　別	(cm)			(g)	備　　考
				長	幅	厚	重	
16	51	Ｔｒ－１ 天守台	石製品　茶臼	6.690	3.245	2.560	108.300	石材　安山岩
17	52	Ｔｒ－１ 礫層	石製品　上臼	30.600	11.685	10.170	2.9kg	石材　安山岩

表8　金属器観察表

図	番号	出土位置	種　別	(cm)			(g)	備　　考
				長	幅	厚	重	
17	53	Ｔｒ－２ 出入り口部	金属製品　切羽	4.205	2.715	0.990	3.5	銅製、孔長2.800、孔幅0.945
17	54	Ｔｒ－２ 出入り口部	金属製品　鎹	3.965	2.205	0.900	4.9	銅製、孔長2.810、孔幅0.910
17	55	Ｔｒ－２天 守平場集石	金属製品　釘	5.585	0.490	0.475	2.7	鉄製
17	56	Ｔｒ－２ 天守台	金属製品　釘	4.360	0.705	0.490	2.5	鉄製
17	57	Ｔｒ－２ 天守台	金属製品　釘	2.610	0.615	0.315	0.6	鉄製
17	58	Ｔｒ－２ 天守台	銭貨　紹聖元宝	径2.370	孔径0.675	0.125	2.7	北宋、初鋳1094年
17	59	Ｔｒ－２ 天守台	銭貨	径2.345	孔径0.665	0.140	2.5	
17	60	Ｔｒ－２ 硬化面	銭貨　寛永通宝	径2.380	孔径0.650	0.090	1.8	背文字「元」、「新寛永」、1697年以降
17	61	Ｔｒ－２ 硬化面	銭貨　寛永通宝	径2.490	孔径0.585	0.125	3.0	背文字「文」、新寛永＝文銭、1668～1683年
17	62	Ｔｒ－２ サブトレ１	銭貨　寛永通宝	径2.505	孔径0.590	0.125	3.1	背文字「文」、新寛永＝文銭、1668～1683年
17	63	Ｔｒ－２ 天守平場	銭貨　寛永通宝	径2.400	孔径0.615	0.115	2.5	「新寛永」、1697年以降
17	64	Ｔｒ－２ 攪乱坑	銭貨　寛永通宝	径2.295	孔径0.645	0.100	2.5	「新寛永」、1697年以降
17	65	Ｔｒ－２ 天守台	銭貨　寛永通宝	径2.330	孔径0.600	0.110	2.5	「新寛永」、1697年以降
17	66	Ｔｒ－２ 天守台	銭貨　寛永通宝	径2.270	孔径0.670	0.095	2.4	「新寛永」、1697年以降
17	67	Ｔｒ－２ 天守台	銭貨　寛永通宝	径2.820	孔径0.665	0.130	4.5	四文銭、11波、1768年以降
17	68	Ｔｒ－２ 天守台表採	銭貨　寛永通宝	径2.425	孔径0.585	0.115	2.7	「新寛永」、1697年以降

天守台石垣 2（南面）

天守台石垣 3（東面）

図版2

天守台石垣1

天守台隅角部
崩落状況

天守台穴蔵(東より)

天守台石垣５

天守平場
礫集中箇所（南より）

同　上（北より）

図版 4

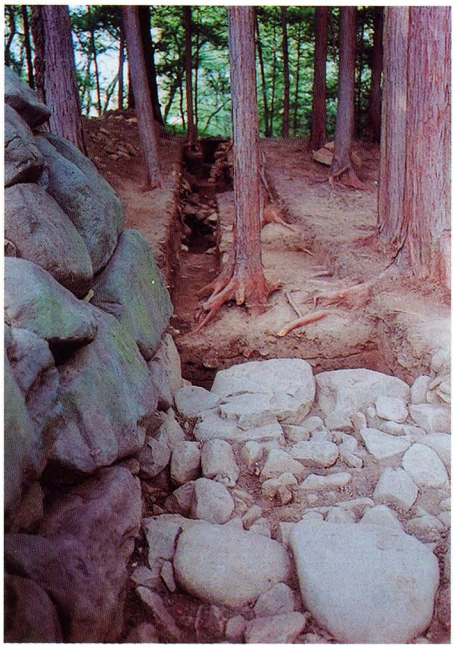
天守北側出入り口部
（南より）

同　上（東より）

同　上（北より）

天守北側出入り口部
下層石列検出状況

天守北側出入り口部
隅 角 部



トレンチ１
（南より）

トレンチ１調査状況

図版6

天守西側出入り口部
（調査前）

同　上（南より）

同　上（調査状況）

天守西側出入り口部
（調査状況）

天守西側出入り口
隅角部崩落状況

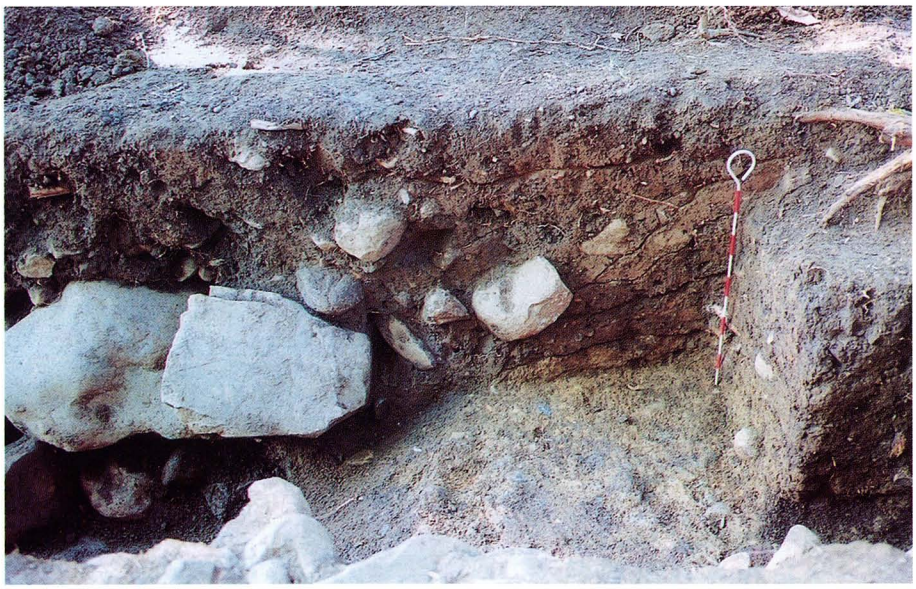
天守西側出入り口部
礎石検出状況

天守西側出入り口部
石積み検出状況

図版８

土塁内石積み
（南より）

同　上（検出状況）

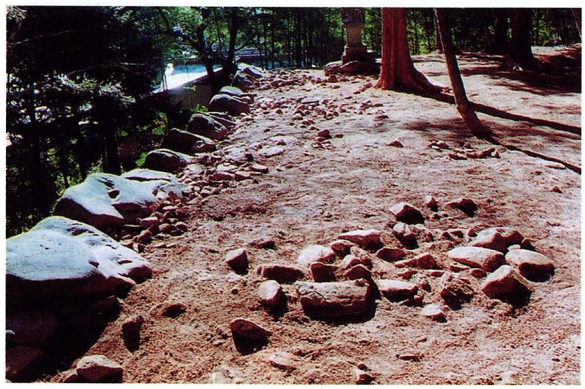


主郭土塁確認状況

作 業 風 景

天 守 南 側

天守北側出入り口
隅角部崩落状況



天 守 東 側

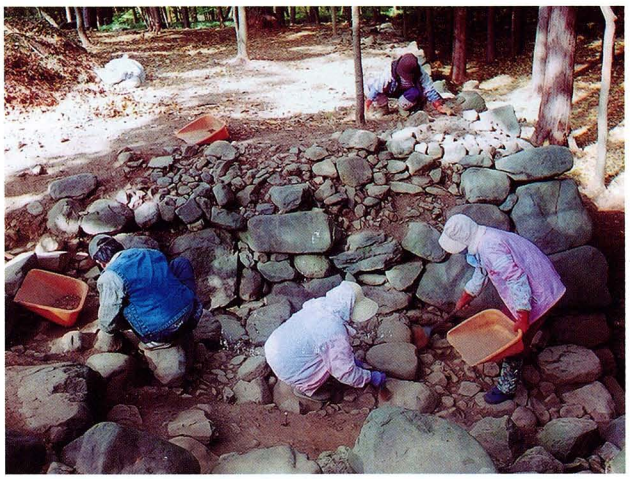
天 守 西 側

作 業 風 景

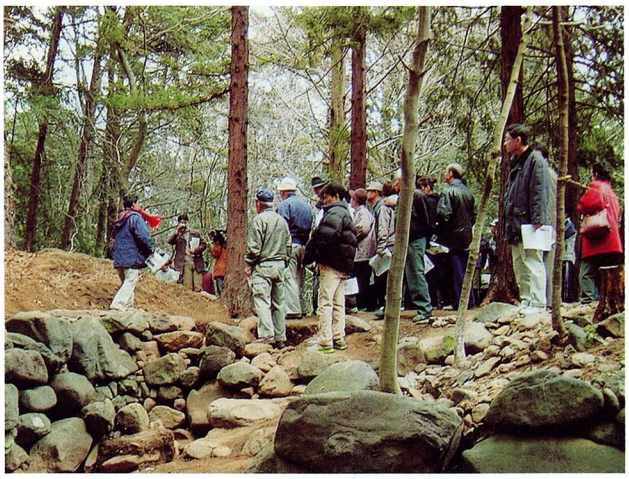
視 察 風 景

調査参加者

図版10

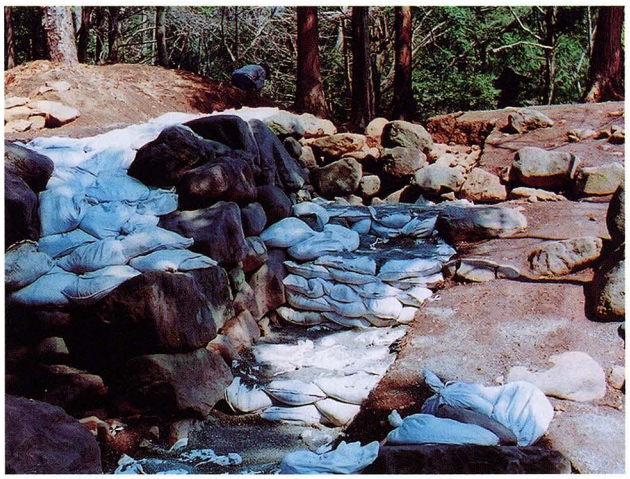


作　業　風　景



見　学　会　風　景

遺構養生状況
（北側出入り口部）

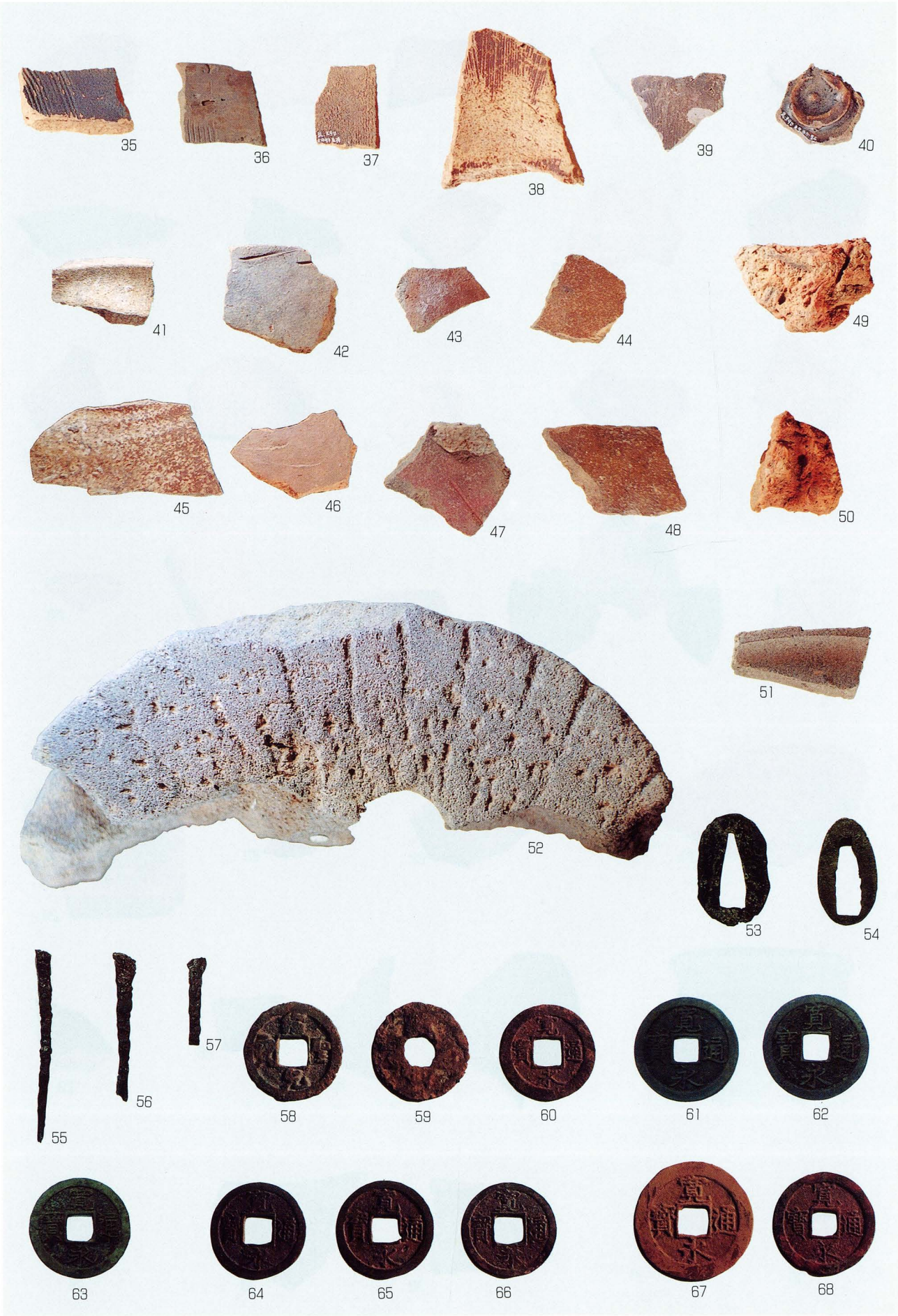


遺構養生状況
（西側出入り口部）

調　査　参　加　者

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

図版12


35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
49
45
46
47
48
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと
書名	史跡武田氏館跡
副書名	平成14年度天守台地点試掘調査概要報告書
巻次	Ⅻ
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	25
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成16年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 調査面積	調査原因
しせき 史跡 たけだしやかたあと 武田氏館跡	やまなしけんこうふし 山梨県甲府市 古府中町 屋形三丁目 大手三丁目	19201	1110	35° 41′ 11″	138° 34′ 38″	H14.8.1 ～ H15.3.26	史跡保存整備 事前調査
				平成14年4月1日 測量法改正後		120m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 武田氏館跡	城館跡	中世	土塁・石垣・ 土塁内石積み	かわらけ・常滑壺・ 青磁壺・白磁皿・染付・ 釘・壁土・銭貨	

甲府市文化財調査報告25

史跡　武田氏館跡 Ⅻ

― 平成14年度天守台地点試掘調査概要報告書 ―

平成16年３月31日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内１丁目18番１号
TEL 055（223）7324
FAX 055（226）4889

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

史跡武田氏館跡天守台平面図

史跡武田氏館跡天守台ーハチ平遺構図